

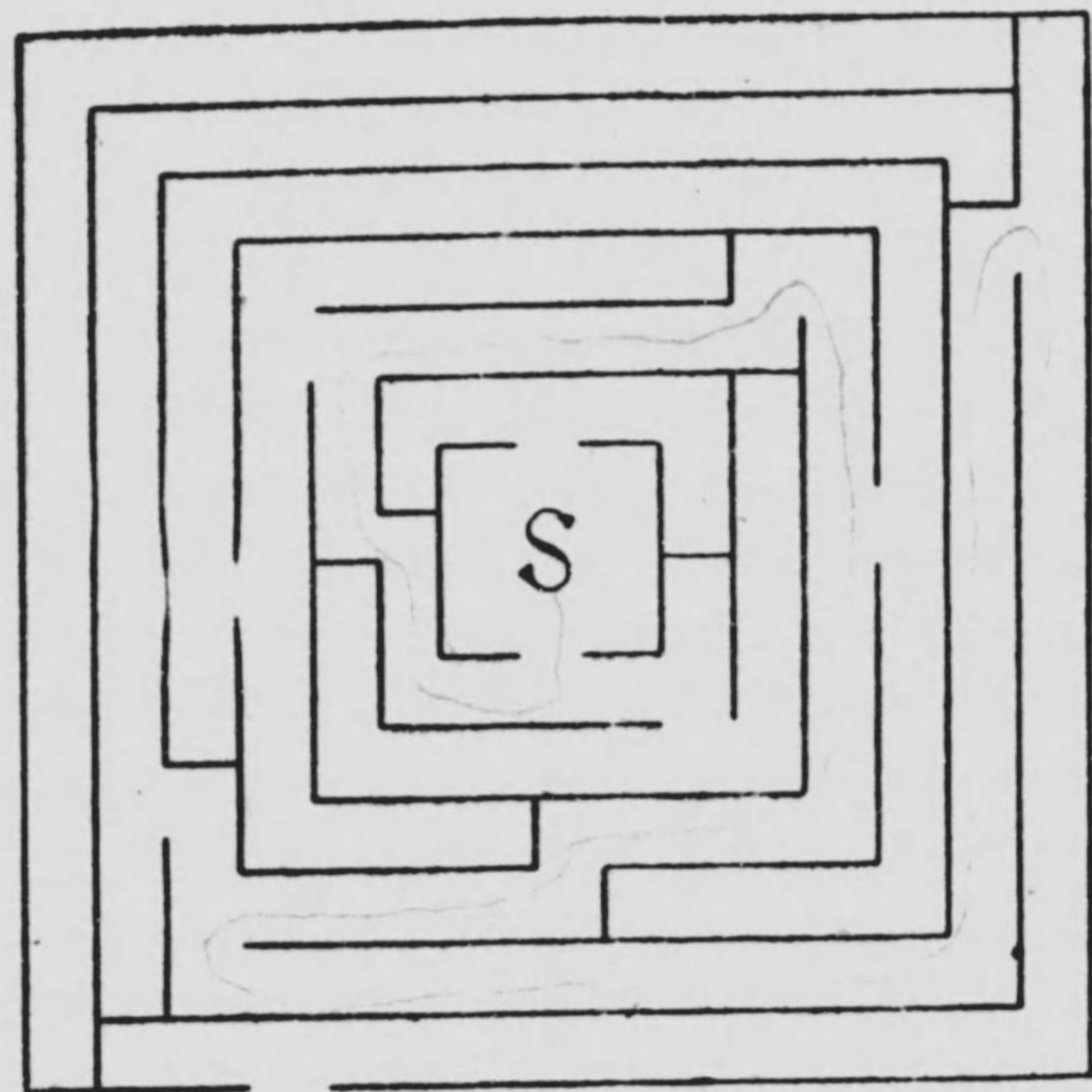
も宗派の多いことは世界中にあまり類のない處であらうとおもはれる。此の點に於て日本人はノルド民族と甚だ似通うて居るのである。

### 第五節 情意検査に現はれた

#### 日本人の特質

ホルチューリスは氏の工夫した迷路の検査用紙を用ひてハワイに於ける諸民族について検査した。迷路の検査は第十二圖の様な印刷物、それは容易なものから漸次複雑なものが用意されてあつて各被験者は、圖中Sと書いてある處から鉛筆で線の間の溝を通過して圖の外に出るのである。各錯誤に對して減點する。そして成績は全體をなし遂げるに要した時間と錯誤數によつて精

第十二圖 迷路検査用紙の例(大)

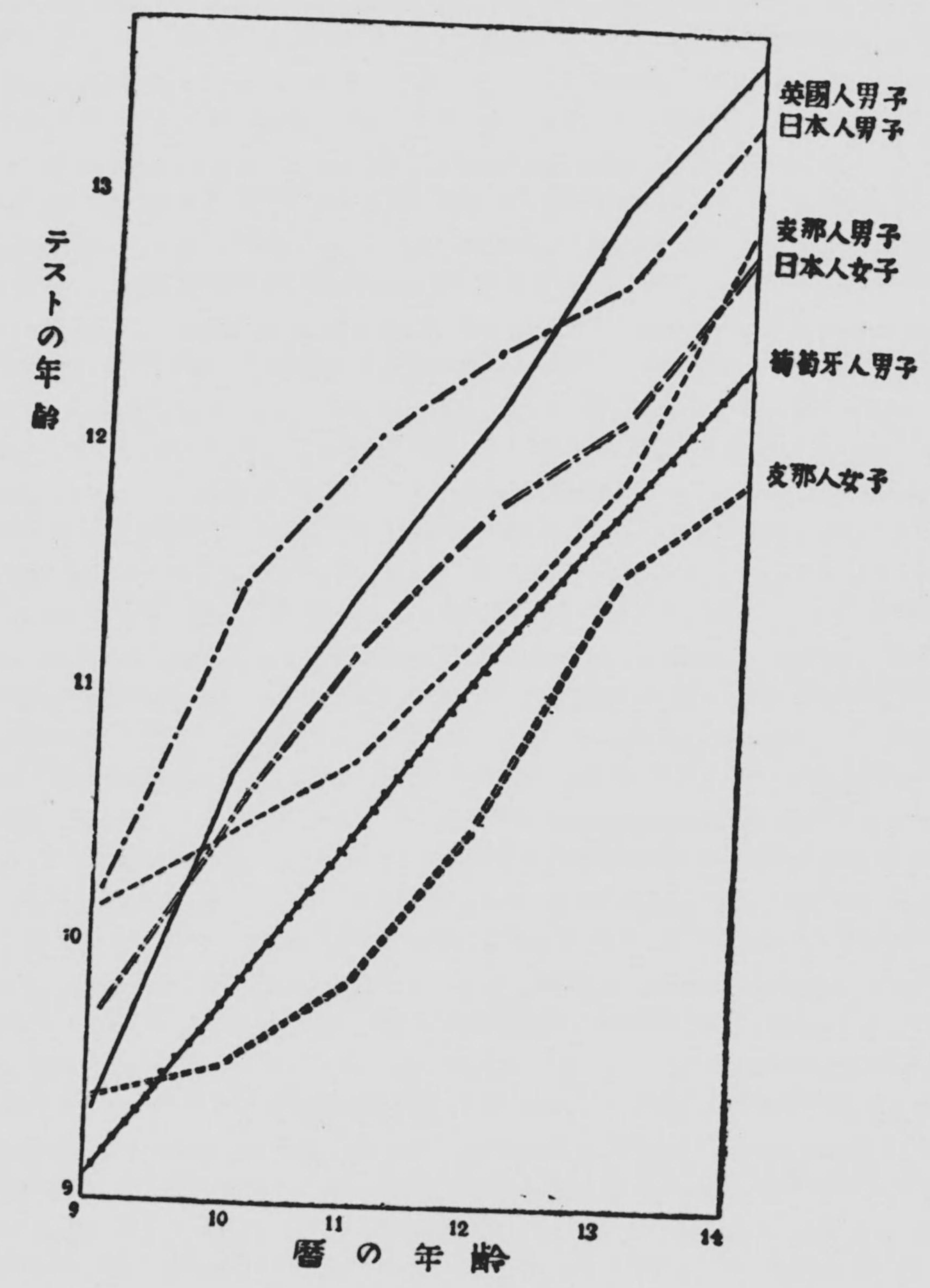


神年齢で表はす。此の検査では衝動的な向見ずのもの、又は豫め立てた計畫を遂行し得ないもの又は神經的で興奮し易いものは混亂して錯誤を來たすのである。それ故に此の検査では一般智能といふよりは寧ろ情意の特質を検査することになるのである。

氏は此の検査法及びビネー氏法を用ひて九歳から十四歳までのもの一千人以上を検査した。ビネーの方法では日本人、支那人、葡萄牙人相互及び男女間に相違はなかつた。併し、氏が濠洲で英國人の兒童を検したもの



第十三 特圖意的情徴の比較(ポルチユース)



に比すれば右三民族の児童は著しく劣つて居る。氏は之を以て智能の差を示すものでなく言語の習熟の度によるといつて居る。然るに氏の試みた迷路検査では第十三圖に示す様に各民族の差異が明かに現はれて居る。此の圖によれば、日本児童の男児は九歳のときから他の總ての民族の児童に優つて居る。但十二歳と十三歳の頃に一時停滞しアングロサクソンの男児(北米に於ける標準成績)より多少劣つては來て居るがその後尙發達をつゞけて居る。此の検査では二十歳頃まで發達することが他の場合に示されて居るから十四歳以後に如何なる位置を占めるかは將來の研究題目として興味がある。次に日本人の女児はその男児よりは劣つて居るけれども支那人の男女兒よりも又ポルトガル人の男女兒よりも優つて居る。故に日本の児童は此の検査法で檢

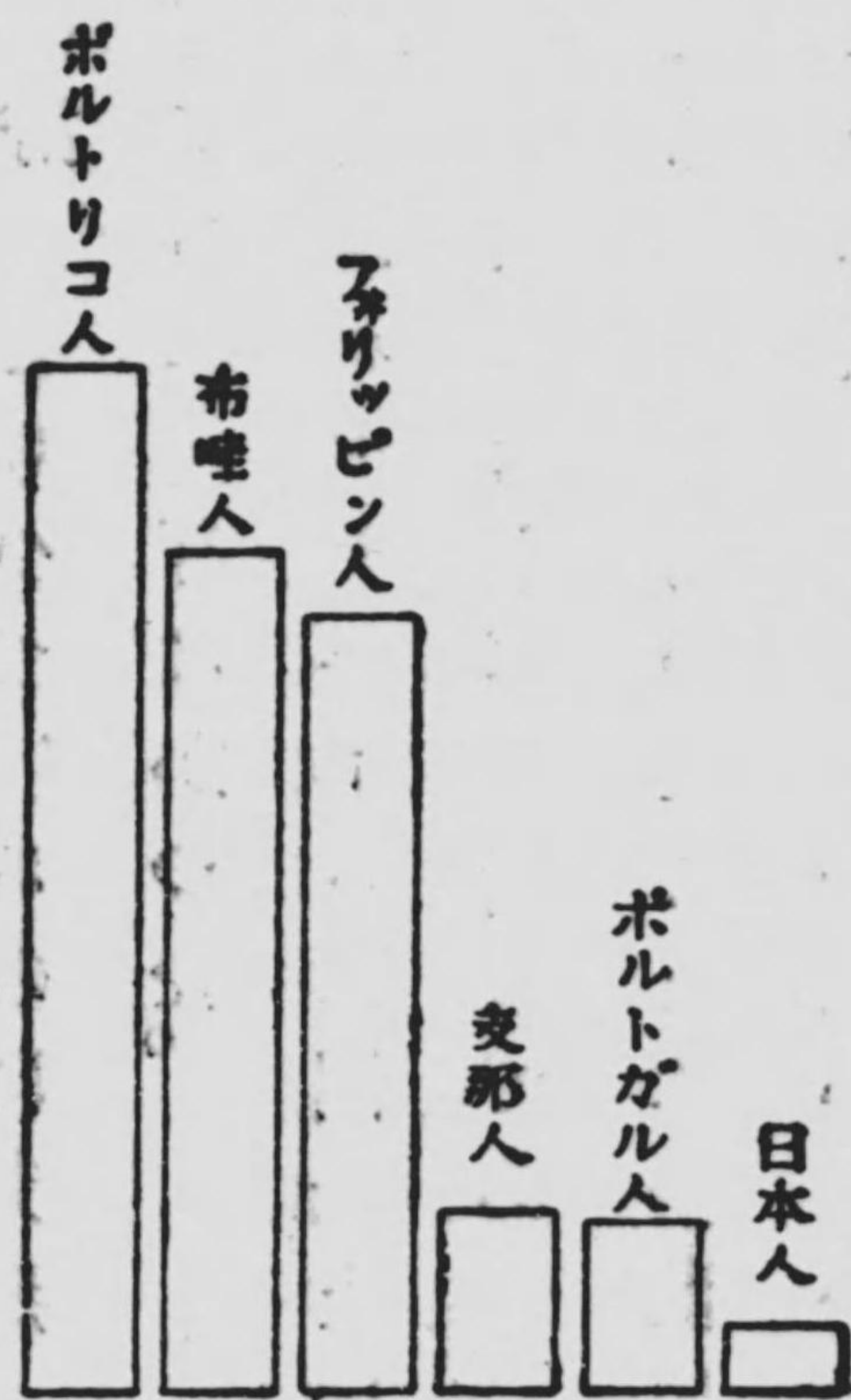


査し得ると稱せられて居る固執性、暗示に對する抵抗性、敏捷興奮を抑制する力等に於て他の諸民族に優つて居るのである。尙氏のいふ所では各民族とも環境の殆んど等しいものを検査したものであるから日本人の児童だけ特に優れたものを選んだといふ抗議はあり得ないといふことである。

右のテストに現はれた民族性の差は高等教育の場合にも現はれて居る。ポルチューリスはハワイ大學の新生生についてソーンダイク氏の工夫した中學卒業生用智能検査を適用した所、第一位はアングロサクソンの組であり、第二位は日本人の組、第三位が支那人の組であつた。然るに一年の後、學業成績を比較して見たのに日本人が第一位を占め、アングロサクソン人は第二位に落ち、支那人はやはり第三位であつた。そしてポルトガル人の智能は極

めて劣等で殆んど大學に席を置くものがなかつたといふことである。氏は日本人について次の様にいつて居る。「日本人はビネツ法によつて検査される様な學習能の缺陷を忠實と勤勉によつて補つて居る。固執性と成功せんと決心とが彼等を高い位置に置くのである」と。

第十四圖 民族と犯罪



であつて支那人やポルトガル人の約三分の一に過ぎない。又動

更に社會的現象から各民族の特異性を比較すれば、興味がある。第十四圖はハワイに於ける各民族の總人口に對する犯罪者の百分比を示す。最も少いのは日本人



勉の一つの標徴として銀行預金を比較して見るに日本人の三〇%は貯金をもつて居るのに支那人は一〇%、ポルトガル人は九%を有するに過ぎなかつた。

最後にポルチューリスは、國民といふ立場からいへば日本人の情意的特徴は驚くべき資産である。日本人が最近の大災厄に當つて堅忍冷靜であつたことは全世界の稱讚する所である。又政治的にいへば——此の研究から一の教訓が與へられるとちもふが、それは太平洋の優者となることに對して他國民との競争者として日本人をば決して過小視してはならぬ。國民の凝集力は驚くべきものがある。支那人はハワイ人と多く雜婚して居るのに、ハワイに於ける混血兒中日本人の血の混つて居るものは一%にも及ばない。」といつて居る。最後のとについてはハワイに於ける

總人口中日本人が最大多數を占めて居ることを合せ考へると興味がある。

之を要するに第十章に於て見た所では日本民族の智能は優秀で地中海民族を遙かに凌駕し、今日文明の牛耳を執つて居ると稱せられるノルド民族の智能に匹敵することを知り、第十一章に於て述べた所からすれば民族性の他の重要な方面なる情意的特徴に於ても地中海民族よりはノルド民族の方に一層よく似て居ることを推斷することが出来るのである。



## 第十二章 日本民族の獨創力

日本民族の智能の優秀なことは前に之を述べた。然るに、こゝに智能に關聯して一つの重要な問題がある。それは獨創力或は創始能と稱せられる特徴についてである。從來、歐米人で日本民族を批評するものは、日本民族に獨創力の缺けて居ることを自明の事實である如くに述べるのが普通であり、而して日本人自身も亦直ちに之を承認する傾向があつた。日本民族は果して獨創力に於て劣つて居るのであらうか。之れは極めて興味があり、而して極めて重大な問題である。私は此の問題に對しては石川博士と共に日本民族は獨創力に於て決して劣つて居ないと答へたいのである。

然るに現今日本に於ける科學の研究及びその應用に於て全體として獨創といふものが少い。多くは西洋の模倣である。又之を歴史に徴するも、見方によつては政治、宗教、藝術等に於て殆んど外國の模倣でないものはないといつてよい。即ち、現代の事實と歴史上の事實が右の様な次第であるのに尙日本民族の獨創力を認める理由は何處にあるか。試みに、その理由を擧げて見よう。

第一に日本の建國は隣邦支那よりは遙かに後れて居た。日本民族が支那と交通する様になつたときは既に彼の國では著しい文化を示して居た。かゝる場合に先進國の文化を模倣することが最も自然であり、又最も經濟的な仕方である。而して、それが我が國が鎖國の夢から覺めて西洋文化に接觸したときにも同様であつて、その情性が今日に及んで居るのである。



第二に過去の歴史に於ては總て外國文化の模倣の様であるが、必ずしも模倣に終つては居ない。即ち如何なる時代にも先づ模倣したけれども、次第にその手本から脱化して日本的なものを創造して居る。之を文學についていへば漢學の輸入について假名文字の工夫は國文學を發達せしめ、その方面に多くの獨創的なものを作り上げて居る。又之を宗教について見るに親鸞や日蓮の如き日本獨特の新宗教が發生して居る。これをしも獨創といはなければ何を獨創といふか。元來純粹な模倣もなければ又純粹な獨創もないものである。フイエがいつて居る様に模倣は必ずしも獨創の精神の缺けて居ることを示さない。模倣と獨創とは隠れた調和を有つて居るもので互に相反對するものではない。獨創も決して無から起ることはない。タルドが「模倣は合流して

發明となる」といつたのは正しい。單に表面的觀察をして居るから日本民族に獨創力がないといふのである。

第三に民族によつて獨創力を示す方向が異つて居ることを忘れてはならぬ。西洋に創められたもので日本にないものがある代りに、日本特有のものがあつて西洋人の企及し得ないものがある。西洋の管絃樂は日本になかつたけれども三絃樂や謠物等は日本民族の獨創である。又支那や西洋にある武器はそれらの民族の特徴を示して居るが、日本刀の製作に至つては如何なる民族にも追従を許さない程度の獨創である。更にわが劍道と柔道に至つては西洋のフェンシングやボクシングとは全く獨立に發達したもので、その性質は著しく異つて居るのである。

第四には右の如き見地から見れば過去に於て、日本民族中から



獨創的天才が輩出して居る。後藤子爵がその著、日本膨脹論中に掲げられたものだけを摘記しても百濟、河成、巨勢、金岡、惠心、僧都、雪舟、元信、探幽、光琳の如き藝術家があり、柿本人麿、山部赤人、紫式部、西行、芭蕉、西鶴、近松、馬琴の如き文學者があり、聖德太子、弘法、傳教、道元、法然、親鸞、日蓮の如き宗教家、思想家があり、豊太閤、家康の如き武將があり、藤樹、仁齋、白石、素行、象山、松陰の如き學者、徳行家があつた。而してこれ等の人々及びこれ等に匹敵すべき多くの人々は皆世界的天才として認められる資格を備へて居るものであつて、唯その業跡が西洋にあまり紹介されて居ないだけである。勿論近世に發達した科學的天才に至つては極めて乏しい。併し、それは模倣時代を距ることが遠くないからである。而かも、乏しいとはいへ、過去に於て誇るべき數學的研究があつたことを想出さず

には居られない。即ち關孝和等一團の人々の研究である。今、その一例として、こゝに圓周率の研究の一端を述べる。數學書で有名な塵功記は吉田光由が寛永四年(西曆一六二七年)に支那の算法統宗を翻譯したものといはれて居るが、此の書に採用した圓周率は三・一六となつて居り、その後に出た野澤貞長の算法童介抄(西曆一六六四年)には三・一四を用ひて居り、佐藤正興の算法根源記(一六六六年)には三・一四二をとつて居る。尙それよりも早い西曆一六六三年出版の村松茂清の算組には三・一四一五九二有奇と算出してある。更に一六八四年に再版を出した磯村吉徳の算法闕疑抄には三・一四一六を採つて居るそうである。こゝまでとかなり精密な研究であるが、關孝和及びその以後の研究は益々精細を加へて居る。西洋に於ける圓周率の研究はニュートン(一六四二—



一七二七)及びライプニッツ(一六四六—一七一六)以後に精細になつたものであるが、關氏の生れたのは實にニュートンと同じ年でライプニッツよりは四年前の西暦一六四二年で、二氏よりも早く西暦一七〇八年に歿して居る。而かもその著大成算經には三・一四一五九二六五三五八九七九三二三八四六二六四三をとつて居る。その後、關氏の系統に屬する人々の中で建部賢弘は一七二二年に四十二桁まで、有馬頼僮は一七六九年に五十桁まで計算して居る。西洋でもこの方面ではニュートンの後に著しい發達をしたといふ事實から見れば殆んど同時代に殆んど同じ精細密さに達したと認められるのである。(小川通司氏空間教育の實際參照)

第五には現代に於て日本民族中に獨創的研究を出したものが少くないことである。歐米に發達した科學的研究を輸入して以

來約五十年を經過した。其の大部分の歲月は全然模倣を事とした。併し、今や種々の科學に於て歐米の學界に出して誇りとするに足る研究が續出しつゝある。米國で活動して居る野口英世博士又米國で有名になつた故高峰讓吉博士の二人を挙げただけでも充分である。その外水銀から金を作ることに成功した長岡博士、ビタミンA抽出に成功した鈴木博士、神經の傳導性について新しい學説を立てた加藤博士の如き、數へ上げれば世界的の名聲を博して居る人々は所謂自然科學の方面に多數ある。

又最近長足の進歩をなした飛行機について見るに、最初飛行したのは米國のライト兄弟で、それは明治三十六年のことであるが、それよりも十年前に、我が二宮忠八氏は既に一種の飛行機を發明して居るのである。然るに西洋人の發明でなければ信用しない



といふ當時の時勢が此の尊い發明を實用に供する所まで發達せしめなかつたのである。

翻つて文化的或は精神科學の方面を見るにその研究が多くは日本語を以て發表せられて居る爲に世界的に注意を引かないのであるが今まで發表せられた中に獨創的研究と認むべきものは決して尠くないのである。

第六には日本の過去に於ける社會的環境が獨創力を現はすに不適當であつたことである。その一つは政權の存在が度々變轉して獨創力を現はす機會を少くしたことである。その二は階級制度が發達して職業が殆んど各の家族に固定したことである。即ち農業に従事する者は代々農業に、武人は代々武人であつたのである。政權を握るほどの家柄のものは民族中でも最も優れた

素質の所有者であるが、それが階級制度の結果として代々同じ職業に従ひ、而かも勢力の消長が極めて頻繁であつたから獨創力を武事以外に發揮することが尠かつたのである。横山俊平學士が我國の上代以來の偉人について、統計的に研究した所によれば第十六世紀以後名聲を博した六百十六人中、領主及び武士の階級から四百十人、學者から十七人、醫者の家から三十五人、庶民階級から七十二人、朝官から七人、不明なもの六十人といふことになつて居る。即ち歴史上に於ける日本の偉人は武人に多くて、文化的方面に少なかつたといはれる。而かも石川博士のいはれる様に民衆の間から音樂上に於ける獨創は著しかつたのである。その三は代々の政權掌握者が民をして頼らしむべく知らしむべからずといふ信條を以て民衆に臨んだことは獨創力の表現を著しくそ



いだであらうとおもはれる。その四には折角獨創力を發揮して假名文字の工夫があつたのに漢字を以て國字とした點である。漢字は一字で種々の意味を包含せしめることが出来るから簡単な文章でも之を了解するには師について學習しなければならぬ。従つて訓詁の學が盛て、學問は即ち古書を讀むこと、同意義に解せられ、而して階級制度の弊は學問をするもの、數を限つて居たのである。

以上の諸點を綜合して考へると、日本民族は決して獨創力に於て缺けて居るのでないことが解かるであらう。從來諸外國人の日本民族についての批評は日本民族に特有な方面を觀のがして居た傾向があり、日本人自身は外國にあるものだけについて日本民族を評價して居たのである。之を繪畫の方面について見ても、

日本人が西洋畫を學び始めてから、餘り年月を経て居ない。従つて西洋畫で傑出した作がまだ出なかつた、然るに長い歴史を有する日本畫では到底外國人の企及し得ない美點があり、傑作があることを忘れて居る。西洋畫と日本畫とはその力の入れ所が異つて居るのに氣が附かないで、何でも西洋流にやらなければならぬと考へて自ら卑下するものが多かつたのである。

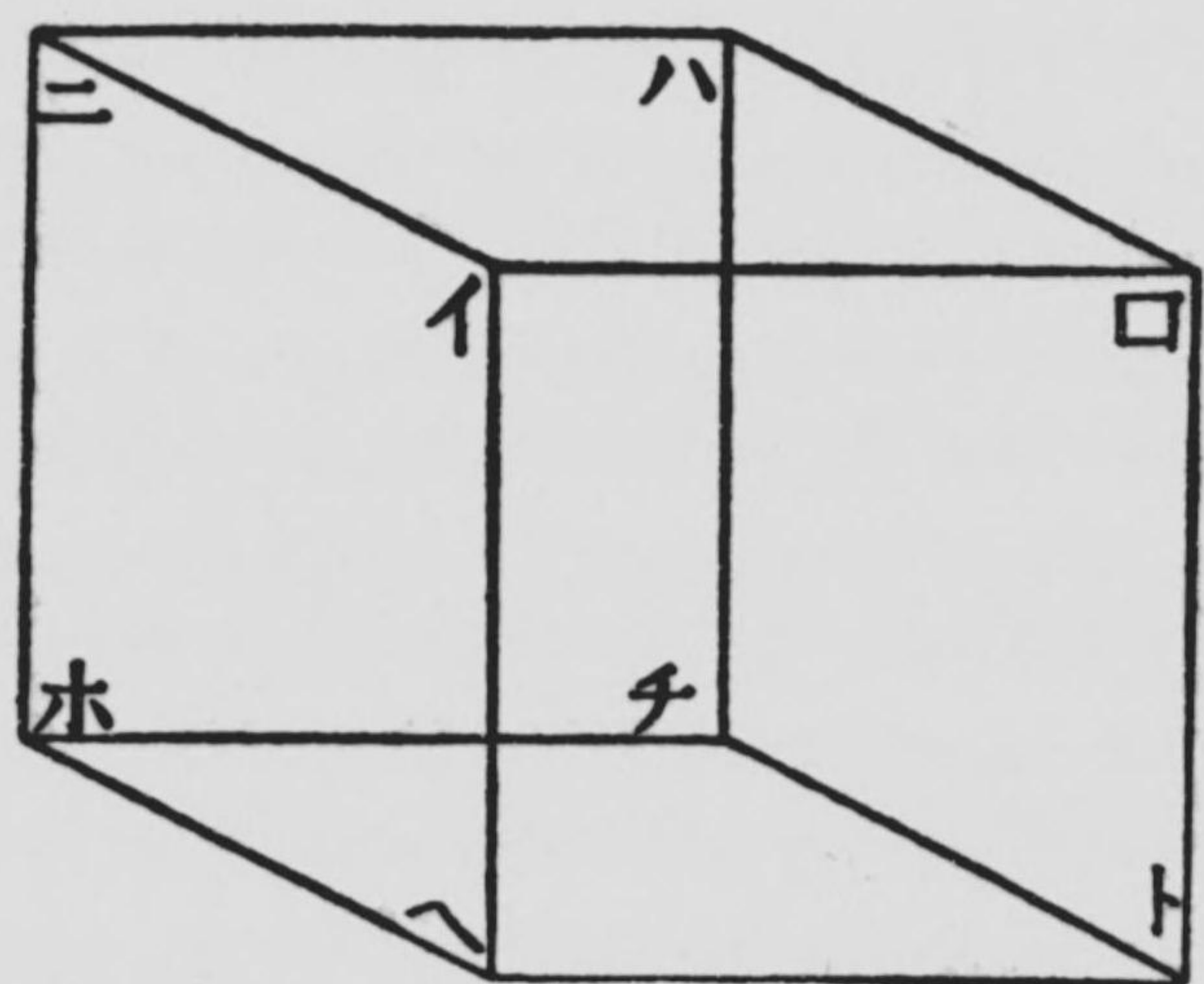
之を思想の方について見ても同様であつて、西洋流の考へ方と東洋流の考へ方との間には著しい相違がある。かれは分析を主とし、これは綜合を主とするのである。何れにもよい點があつて、何れを優れて居るともいはれない。勿論、日本の思想は支那の思想に基いては居るが、その間に日本人の卓見が少くない。之れをすて、顧みなかつたのは、西洋文明を取り入れたとき、その外形の



整然たるに驚いて自然西洋崇拜の風を生じた結果に外ならないのである。

### 第十三章 日本民族の特異性

第十五圖



第十五圖は十二個の直線を組合せた幾何學的圖形である。試みに圖中イ又はハ點を凝視して全體の形體が如何に見えるかを觀察せよ。然るときは恐らくは何人でもホへトチを底面とする立方體を認めるであらう。而してイへトロの平面は自分の方に近く、ハニホチの平面は最も遠い所にある様に見えるであらう。次に圖中ハ又はチの點を凝視するときには前の場合とは反對にハニホチの平面が自分に最も近く、イロトへの平面は最も遠い方にある様に見える



るであらう。

右は同一の圖形が着眼點を異にすることによつて全體の構成に變化を來たすといふ例を擧げたのである。人の性向或は志と日常行爲との關係も亦之と同じ様な原理で説明することが出来る。例へば、こゝに同じ程度の智能を有つて居る二人があつて、一人は他人の財産權を尊重し、決してそれを冒さないと云ふ考へを有つて居り、他の一人はその様な正義の觀念を有たないときは二人の行動は著しい差異を現はすに相違ない。即ち前者は餓死しても他人の財産に手を觸れないのに後者は、その有する智能を利用して他人の財産を奪ふといふ行動に出でるであらう。

同じことが、利己的行爲と社會奉仕的行爲に於ても現はれる。何時でも自己を中心として考へる人と社會奉仕的の考を有つて

居る人とが、その有する智能なり意志の力を活動させる方向は全然異つたものになる。同じ程度の智能と意思の力によつて、或ものは人に迷惑をかけることを敢て行ひ、他のものは愛に満ちた事業を遂行するのである。正宗の名刀も強盜の武器となることもあり、又義侠心の發露として用ひられることもあるのである。かく、中心となる考へ、或は思想の方向即ち志の差異は同じ精神活動をしても異つた結果を齎らすのである。

余は前數章に於て、日本民族の智能の優れて居ること、情意的特徴がノルド民族のそれに似て居ることを述べたが、こゝに余は日本民族の特異性として志向或は志操が他民族と著しく異つて居ることを指摘したのである。蓋し、智能や情意は素材であつて、それ等が中心思想を支へ、或は中心思想に率ゐられて、そこに全人



格的行爲に特色を生ずるからである。

わが民族の歴史を見れば、時に皇室の御威光の覆はれたことはあつたにしても、民族全體の志向が皇室を中心として之を宗家とあがめ奉つた點は終始一貫した所であつて、民族の行動は常にここに基いて居る。之を隣邦支那や歐洲諸國に於ける様に武力の強いものが相繼いで起つて一國の覇者となつたものと同じに語ることは出来ない。このことは既に多くの人々によつて言ひ古されて居る所であるが、日本民族の特異性を考へるには決して見のがしてはならない最も重要な事實である。殊に我國と歴史を異にする外國に産出した種々の新しい思想が輸入せられる今日われ等は日本民族の將來の爲に、われ等の祖先傳來の忠君愛國といふ中心思想を高調しなければならぬ。蓋し、その民族の中心

思想の變化は丁度第十五圖に於て、イ又はハ點を注視することをやめてハ點又はチ點を注視するのと同じの結果になるからである。即ち着眼點を異にすることによつて人の一定の行動はその價値を異にすることになるからである。

祖國を愛する念は殆んど萬國共通のものである。併し日本民族の祖國に對する思想は歐米のものとは全然その趣を異にする。それは個人と國家との關係についての考へ方が彼是相異なるからである。今、そのことを少しく解説する。

こゝに一個の三角形があるとす。歐米人の考へ方では、その三角形を以て三個の要素的直線が結合して成り立つてゐると考へる。即ち、要素が先づあつて、それ等の結合の結果として全體的東西が出來ると考へる。西洋人の考へ方は總て此の通りであ



る。之れを他の語でいへば、彼等は總て物を分析的に考へるのである。自然科学の發達したのは此の考へ方の結果である。而して國家と個人との關係に就ても、やはり同じ考へ方をする。彼等の考へによれば先づ個人といふ要素があつて、それ等の要素の集合したものが國家であるとするのである。従つて國家よりも個人の方が尊重すべきものになる。之の考へ方から、個人主義が西洋人の間に旺になつたものと考へられる。

然るに同じ三角形について今一つの考へ方があることを忘れてはならぬ。それは三角形といふ全體的のものが先づ與へられて、それを分析して見ると三つの直線になるとする考へ方である。之れは最近一派の心理學者によつて説かれる様になつた主張である。即ち、吾々が物を見るときには全體的のもの即ち形態性と

その構成要素との二種を認めることが出来るのである。此の全體的のものが如何なるものであるかは次の例を見れば明かになる。前に考へた三角形に於て其れを黒の線で描いても、又赤の線で描いても、或は又描く地の色は白であつても鼠色であつても、いひかへれば要素的のものは、各の場合に異つて居ても、何時でも吾々は三角形を認めることが出来る。此の三角形といふ全體的のものが所謂形態性である。更に例を擧げるならば今鉛筆で机を打つて第一音を強く、第二音を弱く、第三音を強く、第四音を弱くといふ様に強弱、強弱の順に音を出したとする。そのとき吾々によつて認識されるものは先づ強弱律のリズムであつて、その一々の要素の音は、それに注意を向けて初めて明かに認められるものである。此の個々の音に關する意識は要素であつて、リズム



は全體的のものである。全體的のものは要素に無かつた或る物を新たに有するのが普通である。個々の直線には三角形の性質はないけれども、それが一定の結合をすればそこに三角形といふ新しい性質を生じ個々の音そのものにはリズムの性質はないけれども、それが一定の順序に繼續すればそこにリズムと云ふ新しい性質が生ずるのである。

以上二つの例で明かな如く吾々が物を知るには全體的の形態と、その形態の構成要素とに關するものとの二方面があるが、前者も後者と等しく重要なのである。これを國家と個人との關係でいへば無論個々の構成要素たる個人がなければ全體の國家もないのであるが、一度國家が形成されたならば全體としての國家が主になつて來るのである。日本民族の國家に對する考へ方はち

やうど物の認識に當つて要素的のものよりも全體の形態性が重きをなすのと同じである。即ち西洋人の考へ方が分析的のものを主とするのに對して、われ等のは総合的なものを主とするのである。此の區別を知らないで、徒らに西洋流の考へ方を模倣して國家よりも個人の權利を先きにする個人主義にかぶれるから、國家に奉仕する方面を無視しようとするのである。

労働者と資本家との關係でも同様である。労働者がなければ事業は出來ないけれども資本家が一定の企業をしなければ労働者の價値はないであらう。勿論資本家が利益を壟斷するのはよくないけれども資本家は温情を以て労働者に對し、労働者は奉仕的の考へで仕事に勵まなければならぬ。兩々情を以て相對するときは事業の成績は擧がり益々福祉の増進をもたらしべきである。



然るを徒らに煽動家の口車にのつて外國の個人主義的立場から  
勞働爭議をする様になることは日本の産業界に取つて又國家の  
發展に對して悲しむべき結果を招來するのである。

話は少し横道に入つたが要するに物の考へ方には要素を重く  
見る分析的のものと全體を先きにする総合的のものと二種類が  
ある。而して日本民族が皇室を尊崇し、國家に奉仕する傳統的精  
神は正に後のものであつて西洋流の個人主義を基調とするもの  
とは雲泥の差がある。從來の學者は國家や社會を個人の集合と  
見る分析的の考へ方をして居たから國家對個人の關係を甘く説  
明し得なかつたのである。勿論それは外國の建國の出發點が日  
本のと全然異つて居ることによるもので、その出發點に於ける差  
異を無視して西洋流に日本の國家を考へようとするから種々の

間違つた考へが起るのである。

仁慈なる皇室を民族の宗家とする日本民族はその必然の結果  
として古今東西に無類なる忠君愛國を中心思想として光輝ある  
歴史を保全して來たのである。これは決して偶然ではない。吾  
等がかゝる國體を有する民族の一員として生を此の國に享けた  
ことを無上の幸福として感謝しなければならぬ。然るに常に食  
膳に美味を有するものはその美味を感じなくなる様に往々にし  
て此のありがたい國體のありがたいさを忘れようとするものが出  
て來るのである。之れは實に慨嘆に堪へないことであるが併し  
それも我國體のありがたいさを忘れかけて居るものに對して反省  
の機會を與へることになれば不幸中の幸といふべきである。  
之れを要するに日本民族の皇室及び國家に對する考へ方は諸



外國にその類例のない處であつて、行爲の價值評價は總て忠君愛國の立場から下されるのである。而して、これが日本民族のもつて居る數ある特質の中で最も中心的な特徴であつて、此の特質にして變化しない限り、物質的及び精神的缺陷は悉く之を補うて、餘りがあり、日本民族の繁榮は期して俟つべきである。

#### 第十四章 日本民族の身體的性質

今まで述べた處で日本民族は、その精神的特徴に於て極めて優秀である許りでなく、その中心的思想が諸他の民族のと著しく異つて居ることを明かにした。此のやうに日本民族は優秀な精神的特質を有つて居るとすれば甚だ意を強うするに足るのであるが、併し、精神的優越は又身體的性質によつて援助されなければ、充分に、その優越を發揮することは出來ない。こゝに於てか吾等の身體的性質は世界の競争場裡に立つて果して將來の文化を支へ且つ之を發達せしめるに充分であるか否かを點檢して見る必要がある。

民族の身體的性質は之を生物測定學的、生理學的及び精神動作



學的の三方面から研究することが必要である。生物測定學的研究は身長、軀幹長、胸圍、體重等の身體の靜的方面の測定をするもので、民族間の比較をするには、それ等の測定の結果を統計的に處理しなければならぬ。次に生理學的研究は主として生理的機能について測定或は診斷するものであるが、民族相互の比較をするには死亡率を以て代表せしめることが出来る。第三の精神動作學的研究は力量、運動の速度、正確度等を測定するもので、之れも多數についての測定の結果を統計的に比較するのである。

先づ生物測定學的方法によるもの即ち身體の靜的方面について日本人の特徴を見る。第一に身長に於ては歐米人に比して劣つて居る。ビルヒエル氏の調査中重なる國々のものをいへば、平均身長は(センチメートル單位)北米白人一七一・八、那威人一七一・三、ス

身長は(センチメートル單位)北米白人一七一・八、那威人一七一・三、ス

コットランド人一七〇・三、瑞典人一六九・九、丁抹人一六九・三、獨逸人一六九・〇、露西亞人一六八・六、佛蘭西人一六八・三、伊太利人一六七・六、西班牙人一六六・七等で、此外に八ヶ國のものと合せて十八ヶ國人の平均身長は一六九・二であるのに日本人は平均一五六・九といふことになつて居る。その差は一・二・三センチ(約四寸)である。

次に、體重について見るに體重も亦諸外國人に比して少ない。蓋し體重と身長との間には密接なる相關々係があるからである。身長の小さいことは如何にも貧弱な體格の様に見えるから、從來日本人の體格は劣悪であるとして一般に信ぜられて居る。併し、日本人の身長の小さいのは下肢の長さが短い爲である。白人の下肢の長さは全身長の五五%(ベルツ調査)であるのに、日本人ではそれが四八・七%(吉田章信氏調査)である。然るに下肢の長さの長短は



體格を考へるときにはあまり重要でない。それよりも寧ろ胸の長さ及び太さが一層重要なのである。此の見地から余は體重と上體の高さ及び胸圍の大きさとの比、及び肺活量と上體、胸圍及體重との比を求めて一つの體格検査の標準を設定した(拙著、教育的測定學第四編参照)。その標準によれば日本人の少青年の體格は北米シカゴに於ける少青年の體格に比して必ずしも劣つて居ないのである。即ち、身體の健康に重大な關係を有する部分について比較すれば日本人の體格は必ずしも貧弱ではないのである。

身長や體重の絶對的の分量は何等體格批判の材料にならないのであるが、日本人の體格を今よりも一層大ならしめ得るものであることは二三の例によつて示されて居る。それは文部省の統計によるに少青年の身長、體重は年々増加の傾向があり、又ハワイ

及びシヤトル在住の日本兒童の身長及び體重は内地のものに比して著しい優差をもつて居る(吉田章信氏著、體育資料統計彙纂)。これ等の事實は生活状態の變化によつて日本人の體格は尙改善の餘地があることを示すやうにもはれる。生活状態の變化の中で戶外運動の奨励、營養の改良、住居、被服等の衛生状態の改善等が重要である。戶外運動には、三つの利益がある。一は日光を浴びること、二は新鮮な空氣を深く呼吸すること、三は運動筋肉の發育を助け體力を増進することである。日光が保健上、甚だ大切であることは人のよくいふ所であるが、第十九表に示す統計の結果を見れば、その重要さを一層深く感ぜしめられる。第十九表はベルリン市中で最も不健康地と目されて居るアーベルゲル街に於て日光に面する側の死亡率を一〇とし、日光に面しない側の死亡



率はその幾倍に當るかを示したものである(岡田道一氏、衛生講話資料参照)。この表に示されて居る事實は單に日光のみにその原因を歸することは出來ないかも知れないが日光の影響が、その原因の大部分をなして居るとおもはれる。日光を多く得んが爲に家屋の構造とその方向とに注意すべきは勿論であるが、それを外にしては、

第十九表

日光と死亡率

死亡の種類	倍
肺結核の爲	3.5
脳疾患の爲	4.0
リウマチスと心臓病の爲	4.3
肺疾患の爲	2.5
老衰の爲	1.3
腸チフスの爲	5.4
胃腸病の爲	4.6
生後直ちに	3.4
急死	2.9

戶外運動の奨励が最も効果を奏すると考へられる。但、運動の奨励は徒らに選手を養成することではなく、格體相當の運動を行ひ生

活力の増進を目標とすべきである。さて、身長の小さいこと、従つて體重の少いことは何等悲しむべき現象ではないが、次に生理學的

第二十表

各國に於ける死亡率比較  
(人口千につき死亡數)

	明治	明治	明治	大正	大正
	32—39	40—2	40—2	3—10	3—10
日本内地	20.5	20.6	20.6	22.7	22.7
イギリス	16.7	14.8	14.8	14.0	14.0
フランス	20.1	18.7	18.7	14.0	14.0
ドイツ	18.9	16.6	16.6	17.7	17.7
イタリア	21.9	20.5	20.5	18.5	18.5
オーストリー	24.2	21.6	21.6	19.2	19.2
デンマーク	15.2	15.4	15.4	12.7	12.7
ハンガリー	26.0	24.2	24.2	20.6	20.6
スペイン	26.8	25.5	25.5	24.2	24.2

點のあることを發見する。今各國の死亡率(人口千について死亡數)を示せば第二十表の如くである。研究の範圍に入つて、疾病及び死亡に關する統計的研究の結果を見れば、吾々は大きに考慮を要する



第二十表によればスペインを除く諸外國に比して我國の死亡率は最も高い。但し、大正三—一〇の間には大正七、八、九年に流行性感胃の大流行があつたから多少割引して見なければならぬが併し、その後の大正十一、十二、十三の三箇年の死亡率を見るに順に二二・三、二二・八、二二・二であつて、大正三年から十年までの平均と大差はない。こゝに重要な點は各國共死亡率は年々多少減少しつつあるのに日本にはその形跡がないことである。尤も日本の死亡率は嬰兒及び幼兒の死亡の多い爲に著しく高いものになつて居るのである。試みに大正三年から十二年まで十ヶ年間の統計によれば出生百人中、男一七・七人、女一六・〇、男女計一六・九人死亡することになつて居る。即ち男女合せて出生百人中約十七人の死亡があるのである。佛國ではそれが約八人、英國、和蘭では約九

人である。又、大正八年から同十二年までの五箇年間の統計によれば一ヶ年間の死亡數一千の中で一歳未満で死亡するのが二四七・六人といふことになつて居る。即ち年々死亡するものゝ約四分の一は一歳未満のものである。年齢の増すにつれて漸次死亡率は減少するけれども、十歳未満で死亡するものが出生一千人につき四〇七人の割合になつて居る。實に驚くべき率といはなければならぬ。更に寒心すべきは青年の死亡率の高いことである。第二十一表は大正十三年に於ける死亡千に對する各年齢級の死亡比率である。表によれば、十五歳以後二十五歳までの間に急に死亡率が増大し、その率は五五—五九歳のものゝ死亡率に匹敵する。勿論此の青年の死亡率の高いことは日本に限つたのではないが日本人のは特に目立つて多いのである。(第二十二表參



第二十二表  
各國兒童青年死亡率表

國 別	調 査 年	男		女	
		5-15	15-25	5-15	15-25
日 本	大正3年(1913)	3.7	7.2	4.7	9.2
イ タ リ ー	1907—1914	3.8	5.2	4.3	5.5
フ ラ ン ス	1908—1913	2.9	5.6	3.2	5.1
ド イ ツ	1908—1913	2.7	4.1	2.8	3.8
イ ギ リ ス	1906—1915	2.7	3.5	2.8	3.0

老衰は老年に限り、畸形及先天性弱質によるものは生後間もなく死亡するものであり、又麻疹、百日咳は殆んど幼年に限られて居る。その他の原因中主要なものについて各の原因による死亡を千として、各年齢級(〇歳から五九歳まで)の死亡数を示せば第二十三表の如くである。

同表によれば〇—四歳のもの、死亡の主要原因は下痢及び腸炎、肺炎及び氣管支炎、腦膜炎、胃の

第二十一表  
各年齢級別死亡数及千分比例  
(大正十三年)

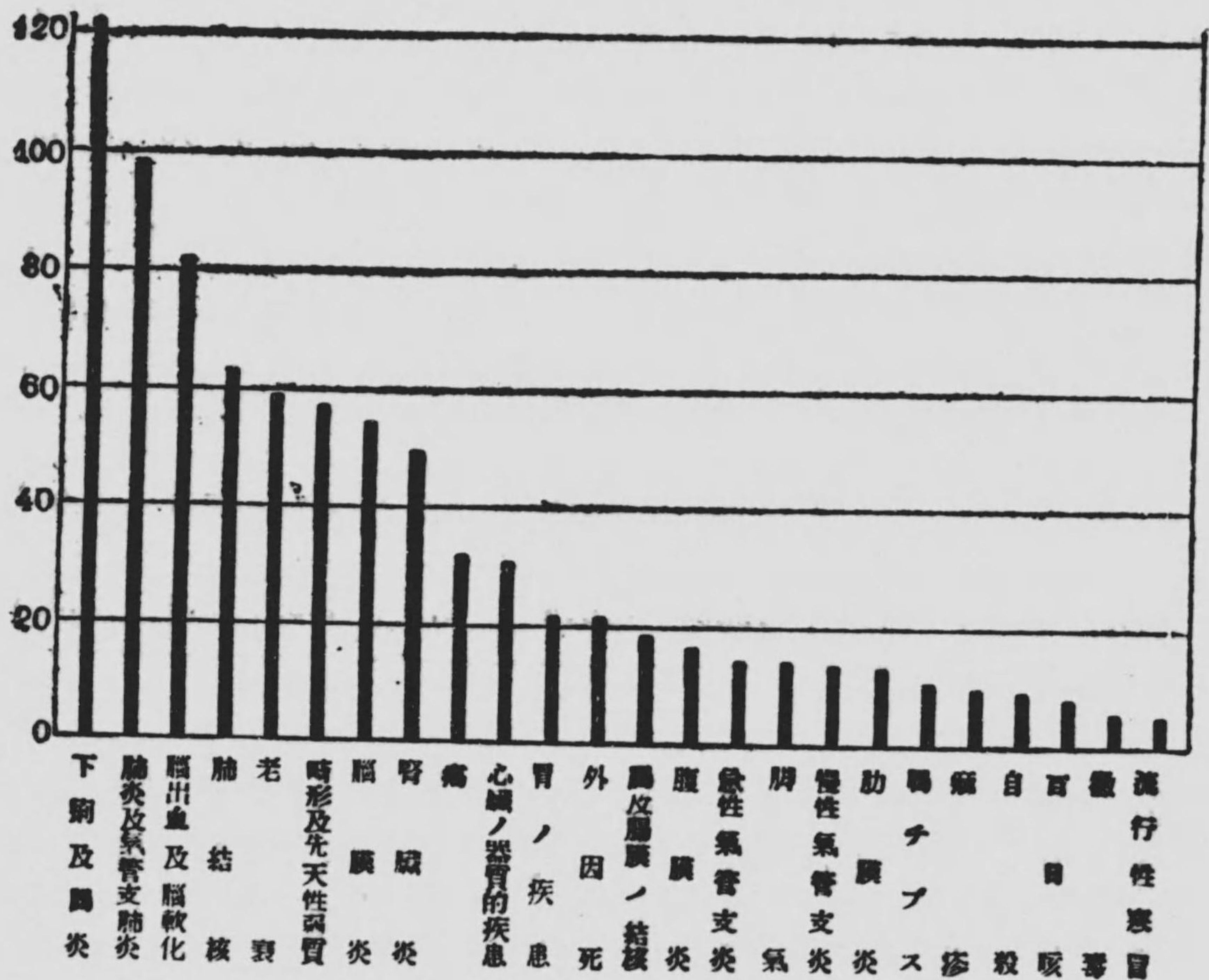
年 齡 級	實 數	千 分 比 例
0—4.....	475,615	379.0
5—9.....	32,595	26.0
10—14.....	25,726	20.5
15—19.....	50,927	40.6
20—24.....	52,504	41.8
25—29.....	39,301	31.3
30—34.....	32,267	25.7
35—39.....	32,782	26.1
40—44.....	36,088	28.7
45—49.....	40,148	32.0
50—54.....	42,041	33.5
55—59.....	54,277	43.2
60—69.....	134,119	106.9
70—79.....	147,610	117.7
80—89.....	54,054	43.1
90以上.....	4,756	3.8
年齢不詳.....	136	0.1
(總計)	1,254,946	1,000.0

ければならぬ。第十六圖は大正十三年に於ける全國死亡原因中の主要なもの、千分比例を示したものである。死亡の諸原因中

照然らば此の青年期に於ける死亡率の増大は如何なる原因に基づくか。その原因を知るには先づ一般に日本人の死亡原因を見な



第十六圖 死亡原因別(大正十三年)  
(千分比例)



疾患と脚氣であり、一五—二九歳のものに特有な死亡原因は肺結核、腸チフスと自殺である。而して、その中最も注意を要するのは肺結核である。此の病氣で一ケ年に死亡する總人員は大凡八万人であるが、その中一五—二九歳で此の病氣で倒れるものが約四萬二千といふ數に

第二十三表 年齢別死亡率 (大正十三年)  
(各の原因による死亡につき各年齢に於ける死亡數)

病名	(實數)	0—4	5—9	10—14	15—19	20—24	25—29	30—34	35—39	40—44	45—49
下痢及腸炎	(151,718)	716.5	22.8	7.9	11.0	11.0	9.5	8.0	8.5	9.8	12.5
肺炎及氣管支炎	(123,403)	692.7	31.3	13.5	19.9	20.7	16.9	14.8	15.4	16.2	15.9
肺出血及腦軟化	(102,666)	3.1	0.7	0.8	1.5	2.5	3.6	6.5	12.5	26.0	46.4
肺結核	(79,410)	27.0	14.6	50.8	188.3	199.6	138.9	89.1	66.5	54.9	49.0
腸膜炎	(68,466)	717.1	78.3	36.4	31.7	24.0	15.4	12.5	10.9	11.3	10.9
腎臓病	(62,227)	121.5	35.2	18.7	20.7	24.9	22.3	23.8	29.8	37.5	45.1
心臓の器質的疾患	(40,147)	.....	.....	.....	0.8	2.0	7.1	17.7	35.2	63.1	88.0
胃の疾患	(39,232)	55.9	21.3	30.9	39.2	38.1	32.7	36.1	44.2	58.0	66.3
脚氣	(26,217)	131.7	10.7	7.2	13.2	18.0	18.0	21.8	28.1	42.3	51.8
腸チフス	(18,333)	475.7	4.0	26.2	32.2	96.7	50.6	40.8	36.5	28.9	25.9
自殺	(14,063)	9.7	26.8	68.1	169.9	161.5	124.8	93.4	98.3	71.3	62.9
他	(11,261)	.....	.....	8.9	101.4	155.0	99.5	70.7	62.2	68.4	67.9



上るのである。而かも此の病氣による死亡率は年々減少する傾向は少しも現はれて来ないことは悲むべき現象といはなければならぬ。吾等は、國民の健康を増進する積極的方法を講ずると共に消極的に公衆衛生に注意して此の病氣による慘禍を軽減することにとつとめなければならぬ。

最後に精神動作學的方面について考へる。此の方面では未だ比較すべき適當な材料のないことを遺憾とする。唯こゝに握力について日本人とオランダ人との比較をなし得るだけである(第二十四表参照)。日本人の握力については檜崎博士の研究により、オランダ人の握力についてはレイイスの研究による。第二十四表によれば男子にあつては十五歳以後日本人の握力は稍劣つて居り、女子にあつては大差がない。元來力量は體重と密接な關係

を有するもので或る人は、正常握力は體重の三分の二に當るといつて居る位であるから絶対握力を比較するよりは體重との比に

第二十四表  
日本人とオランダ人の握力(右手)比數  
(單位 kg)

年 齡	男		女	
	日本人	オランダ人	日本人	オランダ人
6	6.7	7	5.7	6
7	8.3	8	6.6	8
8	9.8	10	7.9	9.5
9	11.1	11	8.9	10
10	14.4	11	10.0	12
11	14.5	12	13.1	12
12	19.1	14	12.9	17
13	21.3	19	16.7	16
14	23.5	22	17.1	18
15	24.8	30	19.1	22
16	26.9	34	22.3	23
17	31.3	34	21.5	23
18	34.0	39	20.8	23
19	38.6	40	21.7	24
20	36.3	40	21.1	24
21	37.1	44	21.6	20

ついで比較して見なければならぬ。然るに日本人の體重はオランダ人のよりも少いのであるから男子に於て十五歳以後に握力



の少ないのは當然の事であり、女子に於て、殆んど差がないのは却つて奇體と考へられる所である。それは兎も角として、將來の文明を支へることに對しては、絶對力量そのものはあまり大きい意味を有つて居ない。これよりも重要なものは運動の速度及び正確度である。然るに此の二つの方面の比較をする材料がない。但運動の正確或は調節度については、日常の觀察で日本人は諸外國人よりも精巧であるといはれて居る。恐らくは實驗の結果に於ても、此の觀察を裏書するに至るであらうと考へられる。併しそれは將來の研究に俟たなければならぬ。

之を要するに生物學的測定の結果に於て、身長體重等の絶對値を比較すれば日本人は歐米人よりも遙かに劣つて居る。併し、健康の指數として適當な比率を求めるならば、日本人の體格は決し

て劣つて居ない。然るに死亡率殊に少青年の死亡率に至つては日本人は遙かに高率を示して居る。之れは恐らくは營養、體育及衛生狀態の改善と公德心の發達とによつて漸次よい狀況を呈するであらう。故に吾等は此の方面に對して此の後大に努力しなければならぬ。最後に精神動作學的研究の材料は直接に比較すべき多くの材料がないから明かに斷定することは出來ないけれども、手腕の絶對力量に於ては多少歐米人に劣つて居るけれども、體重との比率を求むれば、恐らくは殆んど差がないであらう。運動速度に於ては比較すべき材料がないが、正確度に於ては日常の觀察からすれば歐米人よりは優れて居るであらうとおもはれる。かく考へて見れば、將來の文明に貢獻する上からいへば日本人の身體は充分にその任務を果して歐米人に對して遜色はないとい



はれる。但今後努力すべき所は死亡率特に少青年の死亡率を減少することにある。

### 第十五章 日本人は果して早熟であるか

三島通良博士は氏の有名な「日本健體小兒の發育論」に於て「日本人は早熟なり」と論斷された。若しも之れが事實であるとすれば前に述べた加州に於ける智能検査や布哇に於ける情意検査の結果の解釋に當つて多少割引して考へなければならぬ。蓋し早熟の民族と晩熟の民族との精神的特徴を同一年齡に於て比較するときには前者の發達の旺盛なときと後者の然うでない時期とを比べることになるからである。

三島博士の論據とする所は博士自身が日本人について得た青春期に現はれる身體の加速的發育時期が、アクセル・キーの調査による歐洲人のそれよりも早いといふ事實に基いたのである。即



ち、キーの調査の結果では、女子の青春期的發育は、十二歳から十五歳までの四個年間であるのに、三島博士の調査では十一歳から十四歳までの四個年であり、又男子のは歐洲に於ては十四歳から十七歳までの四個年であるのに、我國に於ては十二歳から十六歳までの五箇年であつた。これが三島博士の日本人早熟論の根據である。然るに石川日出鶴丸博士は生長と題する論文(國民衛生、第一卷第二號、第三號參照)に於て、次の様に論述して居られる。

「男子の體量に關しては思春期生長加速度は米國人は十五歳十六歳殊に十六歳に最も著明であるが、日本人では十四歳、十五歳、十六歳の三年齡殊に十五歳に、最も著明である。即ち日本人では思春期體量増加曲線の頂點は一ヶ年程早く現はれて居る。且、生長加速度の始めて現はるゝ時期も日本人では稍、早期に現はるゝ。」

換言すれば日本青年の大多數は早熟である。けれどもホルトの表によると思春期生長加速度の消失する時期は日本人も米國人も同年齡である。また他の歐米學者の表によると寧ろ日本人では、この生長加速度は晩年まで續いてをる。従つて日本青年の一部多數は米國人よりも晩熟であるといふことになる。

女子の體量の増加から見れば「思春期生長加速度の最も著明に現はるゝ年限は西洋人では十二歳十三歳十四歳の三年齡殊に十三歳に最も著しいが日本人では十二歳乃至十六歳殊に十三歳乃至十五歳の三年齡、就中十四歳は最も著明である。この點から考へると日本女子の春期發動は平均すると米國人より半年か一ヶ年程遅れて現はるゝといふことになる。即ち日本女子の大多數は晩熟である。」



次に身長から見ても「生長加速度の最高點は日本では男女ともに米國よりも遅く現はれ、且つ生長加速度は二年程遅く消失する。即ち日本では男女とも米國に比して晩熟であるといふことになる。」

之によれば青春期的發育の起首について體重を基礎とした結論と身長を基礎とした結論とは男子に關しては矛盾がある。氏は此の矛盾を次の如く解釋して居る。曰く、「體重を標準として論ずると、日本男子には早熟ものが最も多く、比較的晩熟者も多く、中熟者が少いといふことになる。さうして、この早熟者は榮養佳良であつて晩熟者は概して榮養不良のものであると假定さへすれば矛盾が消失する。一般に日本人は過食安逸してをる。その爲に身長割に體重増加が早く最高點に達し、従つて意外に早期

に春機發動するのであると私は想像する」と。一意見といふべきである。

最後に氏の所論を總括して、(1) 生後年々の増加は概して日本人の方が獨米人より心持ほど少い。(2) 思春期生長加速度は男子では日本の方が早く起り女子では大差ない。思春期加速度の最大値は日本男子は獨米人よりも早期に、日本女子は晩期に起る。そして思春加速度の持續する時期は日本では男女ともに長い。(中略) (3) 日本では生長が中止する年齢は獨米より晚い。彼れにあつては實用上では十八歳として居るが、日本では二十歳早くとも十九歳である。」と述べてある。

右と同様の結論が文部省學校衛生課が發表した全國學校兒童生徒、學生の身長、體重等についての統計によつて得られる。今試



第二十五表  
日歐人の青春期的發育期比較

研究者	男	女
アクセル・キー	14—17	12—15
ストラッツ	13—17	11—15
[三 島]	[12—16]	[11—14]
文 部 省	13—17	12—16

みにアクセル・キー(北歐人について)、三島氏及び文部省の調査の結果による青春期的發育期を比較すれば第二十五表の通りである。

第二十五表と前述石川博士の研究とから推断すれば日本人は決して早熟ではないことが解る。青春期的發育は氣候殊に氣温と關係があるから、日本人が早熟の民族であるか否かを見るには大凡氣候の等しいオランダあたりのものと比較しなければならぬ。そうすれば、日本人は却つて晩熟であるといふことに結論しなければならぬ。

第二十六表  
オランダ人月經開始年齢(ストラッツ)

階級 年齢	上	中	下
11	12%	4%	.....
12	22	10	.....
13	40	24	4%
14	16	26	8
15	8	28	18
16	2	4	22
17		4	26
18			10
19			10
20			2
平均	12.9	14.1	16.4

尙日本人の晩熟である證據は女子の月經開始の年齢の比較に於ても現はれて居る。今、武政太郎氏が日本の各地の高等女學校の生徒二千百四十五名について調査したものとストラッツがオランダ人百五十人(社會階級上、中、下各五十人宛)について調査した結果を表示すれば

第二十六表及第二十七表の如くである。

第二十六表では社會的階級によつて月經開始期を異にするこ



とが明かに示されて居る。而して中流階級のもの平均して一四・一歳、即ち十四歳一ヶ月餘に於て初潮を見るのである。第二十

第二十七表

日本人月經開始年齢(武政氏)

年 齡	出現人数	%
11—11.9	14	0.7
12—12.9	114	5.3
13—13.9	487	22.7
14—14.9	883	41.1
15—15.9	519	24.2
16—16.9	116	5.4
17—17.9	12	0.6
計	2,145	100
平均年齢—14.45		

候の等しいオランダ人に比して決して決して早熟ではないことが示される。

七表、武政氏のは高等女學校に就ての調査であるから、かりに之を中流のものとして考へて見るべきであらうが、其の平均は一四・四五即ち十四歳五ヶ月餘になる。之れによつて見れば大凡氣

尙米國人の初潮期について見るに研究者の報告がまち／＼であつて、ツツケルマンがニューヨーク人について調査した所では一四—一五歳、チャドウィックのも一四・五で略ぼ本邦人と同じになつて居るが、ケネデイのでは一三・七、ランカスターのでは、一三・七となつて居て、皆本邦人よりは早熟である。即ち、女子の初潮期から見ても日本女子は決して早熟ではない。

以上述べた所を総合すれば體重の青春期的發育開始期に於てのみ本邦男子が歐米人より稍々早いといふだけで、その他の場合は歐米人と同じであるか又は歐米人よりも晩熟であるといふことが出来る。



## 第十六章 日本の國土

日本の山水自然の美しさは世界に、その類を見ない所であつて、日本民族は此の點では幸福なといはなければならぬ。日本民族の自然を愛する心情と、國土に愛着する風習は此の天與の風光に負う所が多いのであらう。

風光の美に於ては世界一であるが、その廣大さに於ては世界に誇るべき何物もない。廣さからいへば日本内地の面積は英伊の本國よりは少し廣いけれども米、露、支等に較べては話にならない程に小さい。更にその天産物について點檢するときは一層その貧弱さを感じずには居られない。豊葦原の瑞穂の國も日本人の主要食物たる米麥の産額に於て、今のまゝでは日本人全體を養う

に充分でない。これは實に日本民族に對して一つの大きな脅威である。更に現代文明に必要缺くべからざる鐵、石炭、石油等の産額の少いこと、被服の原料たる綿花、羊毛の産出額の貧弱なことを數へ來れば一として悲觀の材料でないものはない。

併し、その悲觀はあらゆる方面に於て自給自足を目標とするときに起るものであつて、一度見地をかへて有無相通ずる天下の公道に立脚して考へるならば必ずしも悲觀するには及ばない。ちやうど英國が其主要食料たる小麥や肉類をカナダや濠洲に仰ぎ、その代りに他の産業によつて補償するのと同じ様に、種々の生産業に於ける原料を輸入して優越した精神的素質を發揮して優良な加工品を輸出することにすれば足りるのである。而して、その如何なる方面に發展すべきかは企業家、經濟學者等の研究に俟た



なければならぬ。

右の様にして平和の時代には事足りるが、一旦有事の日の事を考へると、そこに大なる不安がある。故に近い將來の對策としては我國に於ても鐵、石炭、石油等の未發見の産地を探索し、更に隣邦の開拓に先鞭をつけることに努力し、而して有事の日の爲に平素から充分な貯藏をして置かなければならぬ。

更に進んで考へるに、地球に埋藏されて居る鐵、石炭、石油は無盡藏ではない。而かも年々の消費高は激増する一方であるから、早晩それ等のものが絶滅する時期が來るに相違ない。而かも、その時期はあまり遠くはない。或人は從來の採掘の状態をつゞけるならば今後、鐵は百年、石炭は百五十年を出でないで全世界のものが盡きると計算して居る位である。石油でも同様の運命を有つ

て居る。現今世界中で石油を最も多量に産出するのは北米合衆國で全世界の産出額の六割以上はそこから出るのであるが、而かも北米合衆國に於ける石油の壽命は約二十箇年といふことになつて居る。勿論世界中では未だ手をつけない地方が多いのであるが、それでも無盡藏ではない。而して石油の消費高は十年目毎に約二倍に激増するのであるから、これも早晩盡きる機會があると考へなければならぬ。

現代の物質的文明の依つて起つた原動力になつて居る此等天産物が早晩絶滅するといふ豫想は他の精神的墮落と共に現代歐洲文明の末路を豫言せしめる有力な材料になつて居るのである。此等の情勢を考へるならば、我國にとつて近い將來と共に遠い將來に對する策として、新たな合金や燃料の生産法について充分な



研究を積んで、其等の方面に革命を起すことを期すべきである。

これは日本を救うと共に亦人類に貢献する所以である。

天産物については右の様であるが、吾々の喜ぶべきことは風光の明媚なことの外に尙、日本には他の一つの優越點があることである。即ち日本の氣候が好適であるといふ事實である。勿論、日本は南北に長い爲に一概にはいはれないし、又歐洲の北海沿岸地方や北米の北部及加州の沿岸地方に比すれば多少遜色はあるけれども、日本の内地の大部分と朝鮮の大部分とは作業を営むに好都合な氣候を有つて居るのである。(第三圖參照)

天與の産物に於ては、たゞひ不足はあつても、決して失望するに當らない。吾等は天與の精神的素質の優良なることに感謝し天産の貧弱なことは却つて吾等に此の素質を益々發揮する様に

努力を教へられるものと考へて、幸に與へられた良い氣候を利用して、彼等の歩む間に走り、彼等のダンスをする間に考へて將來の發展に對して、猛進しなければならぬ。文明は結局人の所産であるからである。



### 第三編 日本民族の將來

#### 第十七章 日本民族の大使命

上來述べた所で日本民族の精神的特徴は極めて優秀であり人がいふ様に日本民族は創始力に於て缺けて居るものでなく、又決して早熟でもなく、その身體的特徴は優に將來の文明を荷ひ之を發展せしめるに充分であることを見た。但、一時鎖國の影響を受けて自然科学の發達とその應用とに於て立ちおくれた氣味がある。併しそれ等の點に於ても今や既に先進國の到達點に達して、漸く、独自の發展をすることが出来る様になつた。而して、その進歩の速かなことは世界諸國が驚異の眼を以て見る所である。

從來の日本文明の發達のあとを顧れば常に外國文明を取り入れては之を日本化して來た。即ち、印度に起つた佛教をとり入れて之を益々發展せしめて今尙之を保存して居る。支那から儒教を輸入して、これまたその思想をとつて自己のものとし、加ふるに國字を工夫して國文學を起した。キリスト教は遙か後に輸入されたが、漸次日本化しようとして居る。而して現代は科學を輸入して之を利用する時期が到來しつゝある。見來れば皆外國文明の模倣の様であるが純粹の模倣ではない。模倣しては自分のものを作つたのである。或は少くともこれを體得した。佛教も儒教もその發祥地に滅びて日本にのみ残つたのである。更に考へるに過去に於ける日本では、優良な素質を有するものが戰術と宗教の方面に集つた爲に他の文化的事業に於て貧弱であつた感が



ある。然るに今や偉才はあらゆる方面に向つて居るから、若しも吾等及び吾等の子孫が先輩によつて示された模範に倣つて努力をつゞけて行つたならば必ずや近い將來に東西の兩文明は日本民族によつて渾然たる一體に融合せしめられ、古今未曾有の大文明が東京を中心として起るであらう。その理由の重なるものは

(一)西洋文明は前に述べた様に分析的であるから之を學習することが容易である。之れに反して日本の文明は綜合的であるから、歐米人が日本の文明を理解することは日本人が西洋文明を體得する様に容易には行かない。而して日本民族は此の比較的學習に困難な方面を先づ發展せしめ、更に西洋文明を輸入して居るから兩種の文明を融合するに最も好都合な立場にある。吾等の祖先と現代の日本民族は國語の學習に極めて多くの負擔を荷ひ

その上に外國語を學習する爲に二重の重荷に苦んで來たが、その努力は今や漸く酬ひられようとして居るのである。

(二)二つの高い文明を融合したものは、その一つのものを發達せしめたものよりも一層高い文明である。此の意味に於て東西兩文明の長所を採つて融合したものは古今未曾の最高文明である。

(三)先進國は天産物が豊富である上に自然科學の知識を極力應用して居るから所謂文明の弊を早くから受けて居る。而して、今やその弊に耐えられない情勢を呈しつゝある。文明の弊の中で最も重大なのは歡樂を追及し、物質過重主義になること、種々の原因によつて出生率の減少することである。

(四)日本の位置は東西兩文明の接觸點として最も重要な地位を占めて居り、その氣候は文明の發達に適して居ることである。



ルーズベルトは曾て次の様にいつた。曰く、「昔、羅馬帝國の衰亡と共に地中海時代は終りを告げた。大西洋文明の時代は目下その絶頂にあるが、之れまた遠からず資源の枯渇を見るに至るであらう。而して之れに代るものは實に太平洋時代である。惟ふに太平洋は前記三時代中最盛を極めるものであらう。それは世界全人類を包容して一團となすものであるから。抑も人類は次第に西方へと移住を行ふもので、その結果遂に地球を一周して今やアメリカの西部の人々は太平洋を中央にしてアジア大陸在來の人種と相對立して居る。米國人の運命は右人類の新運動に伴ふ難關の第一線に立つものである」と。(松原一氏、外交縦談——太陽大正十四年十二月號參照)

太平洋時代は既に到來した。而してこゝに大文明の起るべき

機會に遭逢した譯である。日本民族の使命は實に重大である。而して日本民族はこの重大使命を遂行するに充分な身心の力と適當な氣候に恵まれて居るのである。



## 第十八章 日本民族の覺悟

日本民族の前途は洋々として希望に満ちて居る。併しそれは可能性である。この可能性を實現するには民族の各員の思慮と努力とを必要とする。決して、單に日本民族の優越性を自負したり、外國人の言動を模倣するだけでは得られない。日本民族の大使命を自覺し、その實現に向つて精進することによつてのみ達し得られる。

フイエは歐洲各民族について考察して、最後に結論として、「未來はアングロサクソンのものでもなく、獨逸人のものでもなく、希臘人のものでもなく、將又ラテン人のものでもない。最も聰明で勤勉且つ最も道德的なもの、掌中に歸すべきである」といつて

居る。日本民族の將來をちもふものは、實にこの至言を服膺すべきである。

余は前に民族の將來に對する心理的條件を述べた中に歡樂を追及し、贅澤をすることが直接には民族を懦弱ならしめ不道德に導き、物質尊重主義に傾かしめ、間接には産兒制限を招來することをいつた。これは現代文明諸國における一つの通弊であつて我國にもその潮流は刻々に押しよせて來て居る。我國でも「武士は食ねど高楊枝」の代りにマーデンの「金錢は品性なり」といふ格言を奉ずるものが多くなりつゝあるのである。(國民精神の統一——樗牛全集第四卷參照)

此の思想と關聯して産兒制限論がある。そこで今少しくその



主張について考へて見る。或る人々は産兒制限を以て日本を救う唯一の方法である如くに宣傳するけれども余の考を以てすれば産兒を制限するとは民族自ら墓場を掘るものであると信ずる。之を歴史に徴するに生産率の最大なときがその國の最も旺盛な時である。然るに日本に於ては明治四十四年を生産率の頂上として年々その率を減少しつゝあるのである。徒らに理想論にかぶれて現實を忘れてはならぬ。軍備縮小の美名にかくれて想定敵國を抑へつゝ而かも自ら軍備の充實を計つて、その配下に屬する領土を擴張しようとするのが所謂世界強國の現實である。此の現實を忘れて一年七十萬の人口増殖に恐れをなす人々の短見は寧ろ憐れむべきである。古來如何なる民族が耕し得べき土地の分量を計算して生産を増減したことがあるか。産めよ、育てよ

然らばそこに自ら難局の打開があるのである。

北米合衆國大統領タリッヂ氏は在郷軍人團の面前において「人種的反感を取り去り、世界各國の公心が互に寛容の態度を示さなければ最近の世界大戰は無益に戦はれたものであり、吾人は第二の大戦準備に入りつゝあるものといふべきである」と喝破した。實に名言である。寛容の態度を示さない國が太平洋の何れの岸にあるかは知る人ぞ知るである。翻つて思ふに肉彈相應酬する大戰が近き將來にあるか否かは誰れも豫言し得ないけれども、所謂平和の戦争、それは神経と筋力を極度に疲労せしめる争奪戦は日一日と激甚を加へることは何人も之を否定することは出来ない。而して、悲しい事にはその背後には一朝事あらばと腕を扼して俟つ元氣ある無数の青年を必要とするといふのが現實



なのである。世界の視線は東亞に注がれて居る。此のときに當つて先づ自ら産兒を制限して屈從の素地を作らうとする行動は斷じて排斥しなければならぬ。吾等は自ら戦争を好むものではない。併し戦に對する準備は常に必要である。

産兒制限論の不合理なことは次のことから立證することが出来る。余はさきに近代の文明は人と人との關係が複雑になり、人々に優れた稟質を要求する度が増加しつゝあることをいつた。産兒制限論者の標語に「少く産んでよく育てよ」といふのがある。然るに心理學者、人種衛生學者、小兒科醫等の研究によれば第一子及び第二子は第三子以下のものに比べて心身共に劣つて居る場合が多いといふことになつて居る。身體の方では第一子、第二子は第三子、第四子に比して死亡率が多く、結核に罹る率が多く、

神經性疾患に冒され易い。又精神的には精神異常者、精神低格者、犯罪者等の統計に於て第一子、第二子は第三子以下のものよりも多いことになつて居る。此の様に産兒制限論者の目標は事實によつて裏切られて居るのである。第一子、第二子の心身の劣惡の原因は遺傳の影響よりも親の無經驗から來る不注意等の環境の影響に歸すべきものであらうが、事實は争ふことは出来ない。右の様に第一子、第二子等が心身の劣惡な上に、兄弟の少い場合には將來の社會の生活に必要な精神的訓練を受ける機會が少いから、その様なものは成長の後、社會的に劣敗者たることを免れない。此の様な人物の數が増すときに民族全體の衰亡は必至のこと、考へなければならぬ。蓋し、民族の發展はその民族の量と質とによるからである。



更に産兒制限論者は貧困を救う唯一の方法として制限論を唱へる。若しも一國の富が一定して増減のないものならば人口の少いほど一人當の富は増加するから論者のいふ通りになる。併し、富は結局人間の所産であるから人の質と量とによつて全體の富は増減するのである。従つて、有爲な人材が多數にあつて、協力生産のことに従事することが却つて富を増し、貧困を救う所以であるといふことが出来る。徒らに目前の小康を希うよりは將來の大發展を志さなければならぬ。(永井潜博士著、反逆の息子参照)

又或るものはわが植民の從來の不成績を見て、直ちに産兒制限論の根據を得た様に考へるものもあるが、日本内地に於ても尙多くの人を容れる餘地があり、更に樺太、臺灣、朝鮮、滿洲及び日本人の入國をこばまない支那、南洋等は氣候こそ理想的ではないが尙過

剩人口を容れて餘りがある。從來の植民に於ける不成績は封建時代の鎖國の情性の影響である。今後教育者及び政府當局の指導と民間の企業家の努力とによつて海外に發展するものが、續出して一部の論者をして安心せしめる時期が來るに相違ない。

それに關聯して將來の少青年の教育について一言しなければならぬ。即ち將來植民の可能な地方に關する了解を増し、その地方に必要な外國語の學習を獎勵することの必要を高潮したのである。國外に植民するときに最も必要なもの、一はその土地の言語を自由に使用し得るといふことである。從來日本の植民の振はなかつた原因はこの外國語の素養に於て缺けて居たことに基くものが多かつたとおもはれるから、今後、青少年の教育に於ては此の方面に大に力を注がなければならぬ。而して從來の様



に外國語といへば英佛獨語に限らないで、日本人が將來活動すべき舞臺を考へて支那語、スペイン語、オランダ語、ロシア語等を重視しなければならぬ。かく一方に外國語の種類について考へると同時に他方には教科の内容中に或は課外として將來植民の可能な地方の風物、人情、産業等について詳しい知識を得しめ、進んで海外に發展しようとする志を振起すべきである。かくの如き情勢が一度成立すれば、過剰人口問題は跡をひそめる様になるに相違ない。此の様な進取的の策を執らないで、徒らに退嬰の策に出でようとするのは日本の將來の爲憂うべき傾向といはなければならぬ。

要するに産兒制限論の根據は一として、とるべきものが無い。特に吾々の寒心に堪へないのは産兒制限論の宣傳の實際的影響

である。講演又は著書、論文等に聽く人々は、多くは社會の中流以上のものであつて、比較的有能な人士である。それ等の階級では特に制限をしなくても産兒數の少くなる傾向があるのに、その上に制限を加へるときには、將來日本民族の構成要素の大多數は比較的劣等な素質を有するものになるといふ恐れがある。此の様な事情を考へるときは、たとひ或る種の階級には制限の必要があるとしても従來の如き宣傳法は之を改めなければならぬ。徒らに自己を愛せんが爲に産兒の制限をしてはならぬ。再びいふ、民族の繁榮は人の量と質とに依存するのである。これが日本民族の考慮すべき第一の點である。

文明の進歩は諸民族間の交通を頻繁にし、個々人相接する機會



を多くするのみならず、印刷物等による思想の傳播を容易ならしめる。その結果は各民族とも新しい習慣、新しい思想、新しい信仰、新しい文藝に接觸する機會が多くなり、在來の道德思想が權威を失ひ、人々の行動がまち／＼になり勝ちである。これは現代の諸民族が經驗して居る所で、各國の指導者が、その頭を腦まじつゝある問題である。思想の混亂、不統一も或る場合には進歩の階梯となることもあるけれども、其れが極端に走つて一民族の傳統を破壊し去るときに、その民族は自滅するのである。これ、外國の文明に接觸するときに吾等の心しなければならぬ所である。即ち傳統的中心思想、中心感情を見失はないで、外來の思想なり、感情は傳統的なものに磨きをかけて、それを精練する材料とする心掛けが必要である。そこで、こゝに少しく外來思想に對する態度につ

いて一言したい

由來、人には古いものは之を棄て、新しいものにつかうとする心の一面がある。その好奇心を満足せしめつゝ文化の發達に貢獻する意味で新しい思想の研究をするのは悪いことではない。併し、如何なる思想でも、その起るには相當な理由がある、ことを忘れてはならぬ。彼の勞農ロシアの過激思想の如きはロシアに於て初めて發達すべきものであらう。即ち、時世後れの專制政治に對する反抗心の發露と見れば解釋がつくのである。又支那の一部に過激思想に共鳴するものゝあるのは彼等が元來利己的の民族であつて、國家或は民人の安寧幸福といふことは眼中にないものが多いからであらう。

總て、思想でも何でも新しいが故によいといふものでない。之



れに反して歴史は尊い。蓋し、歴史はその民族に適する思想の發現のあとであるからである。同様に風俗、習慣、道德、宗教等も亦その民族に適するもの、残存したものである。此の明かな事實を無視して徒らに新を追うて外國の眞似をするのは決して賢い仕方ではない。

曾て澤庵亡國論を唱へた人がある。その考によれば澤庵の様な滋養分のない消化の悪いものを食つて居れば國が亡びるといふのである。然るに最近日本人の研究によれば澤庵にはビタミンBを多く含んで居るから澤庵を益、多く食へといふこととなつたのである。前の論者も、徒らに西洋かぶれをしないで澤庵を長い間食つた日本人が強健に壽命を保つて來たことを考へたならば、あの様な論は吐かなかつたであらう。西洋崇拜家の議論は

大凡此の類のものが多し。注意すべきことである。但、併し、吾々の反省しなければならぬことは風俗や習慣などの中にはその起る時には相當な理由があつても、時代を経過するに従つてその理由は夙に消滅して居るのに形ばかりの習慣が存続することがあるといふ事實である。その様な場合には適當な形に之を改良する必要がある。併し些細な習慣でも、それを改變するときには、その結果として如何なる影響があるかを先づ考へなければならぬ。些細な習慣の改變に對してすら此の様に慎重に考へなければならぬのである。況んや民族の中心思想に影響を及ぼす如き思想の研究者は極めて慎重な態度を執らなければならぬ。若しも前掲第十五圖に於けるイ點を傳統的の思想とするならば、ロ、ハ、ニ等の諸點は外來的の新思想である。われ等は周邊ロ・ハ・ニに着眼する



ときに常にイ點から見た圖形を忘れてはならぬ。

日本民族の唯一の誇りとする忠君愛國の精神、而して建國の最初から一貫して居る此の思想はその根ざす所は極めて深いから少數のものゝ變態思想によつて動搖を來たすことはないとは信ずるけれども、世には雷同を事とするものも少くないことであるから、爲政者と教育家の大に注意を拂はなければならぬ所である。從來日本人が徒らに外國人の行動を模倣して得々として居たことは苦々しいことであるが、それには大に理由がある。その原困を深して見るに大凡二つある。その一つは西洋諸國との交通を開いた當時からの情勢であり、他の一つは日本の文化についての深い研究がなかつたことである。

西洋文明の特徴は主として自然科学の研究と其應用とにあつ

て、目の前に容易に示されるものである爲に彼れと、是との差のあることが容易に解り、而してこれは從來日本に最も缺けた點であつた。それ故に西洋文明に初めて接觸した吾等の先輩は日本の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。そして、これは無理のないことである。其後、自然科学の研究はその進歩に於て殆んど停止する所がなく、一步否數十歩も遅れて居た日本人は唯單に彼れ等のやつたあとに追従して行くだけであつた。これが西洋崇拜の主なる原因である。崇拜の結果は一も二もなく總て彼等の行動はよいものと考へ、それを模倣すること一日遅るれば、それだけ時世遅れの様な感を與へ、茲に模倣に對する競争といふ珍現象をひき起したのである。誰れも彼れも一種の暗示にかかつて、自己を反省することをしなかつたのである。



右の様な情勢であつたから、その自然の結果として、日本文化に特有なものがあるか否かをさへ考へるものが少なかつた。従つて日本文化の精髓の如何なるものであるかについてはまだ多くの人々は之を知らない。それは一つは自然科学の研究を摸倣することに較べると著しく困難なことにもよるが一部の人々を除いては之れを探究しようとする心さへも起さなかつたのである。而してその結果として傳統的の中心思想をさへ失はうとしたのである。

併し、今や西洋文明の正體も略ぼ明かになり、心ある人々は内に自ら省みて、日本民族特有の文化について之を明かにしようとする様になつたことは誠に慶すべきことである。將來は一方、西洋文化も之を研究しつゝ、而かもそれに捕はれず、他方、日本固有の文

化について今一層深く探究してその美點と缺點を明かにし、東西兩文明の融合に向つて大に努力しなければならぬ。日本民族の大使命を果たさうとするには、それだけの努力を惜んではならぬ。これが吾等の努むべき第二の點である。

余は西洋文明を自然科学的或は物質的文明といつたが、併し、それは一般的のいひ現はし方である。彼れにあつても吾々の大に學ばなければならぬ多くの精神的訓練がある。殊に日常生活に於ける對人的道德或は公衆道德に於て吾々の師とすべきものが少くない。

對人的道德の中で、信用を重んずること、時間を守ること、汽車電車等に於ける作法等に於て日本人は遺憾ながら英國人などに劣



つて居るとおもはれる。併し、之れは日本人が先天的に不正直であり、他人の迷惑を考へない民族である爲ではない。不正直なことについていへば、英國人でも今日の様に世界に濶歩する前には随分不正直な徒輩が多かつたのである。度量衡でも正しいものがなく、パンの目方を増す爲に鐵の屑を入れて焼いたともあつたといふことである。而して外國貿易の發達につれて成金者流は單に利益を得ることに汲々として我國の商業界より一層德義を重じなかつたのである(野上博士、道德思想の發達参照)。然るに、正直は最良の政策であるといふ教が出来た様に、全く商賣をするには信用第一、正直第一でなければならぬことに氣がついて來て、漸次今日の様に信用を重ずる風をなしたもので決して最初から信用第一を標語とする國ではなかつたのである。我國でもまだ外

國貿易についての經驗が少い爲、時に見本の品よりも悪いものを輸出する様なことがあるが、今や漸次眼醒めて來て居るから、遠からず信用第一の國になるであらうと考へる。それ故に何にも從來の状態で將來を悲觀する必要はないが、各自相誠めて大に信用を博する覺悟をすることは將來の發展上望ましいことである。時間を守らないことについても次第に改善されて居るがまだ充分でない。これも社會生活に慣れない結果であつて、今後の經驗によつて結局は時間を嚴守することが自他の利益であることを體得する様になるであらう。併し、これも自然の發達に任せないでその改善を促進する様に心掛けなければならぬ。電車、汽車等に於ける作法に於ても、まだそれ等に對する訓練を受けることの日が浅いことから他人の迷惑を顧みない態度が多



いのであつて、日本人が先天的に不作法なのではない。又處構はず啖唾を吐くことも不作法の一つであるが、これは肺結核の惨害を味つて居る日本民族にとつては不作法といふことの外に公衆衛生といふ見地から特に注意を促がさなければならぬ。

要するに日本人の公衆道徳上の缺陷は廣い範圍の社會生活に慣れないことから來るものが多いが、その理由で之を恕する譯には行かない。最高文明の建設者としては、此等の點に於ても亦優れて居なければならぬ。これが注意すべき第三の點である。

今一つ注意すべき重要なことは科學の研究とその應用とについてである。吾々は精神文化を高調するけれども、それと同時に科學的研究とその應用との重要をも大に認めるものである。

日本には外國にない様な尊い文化があるけれども、それだけでは優越民族にはなれない。その上に更に科學的知識を利用して、生活の改善と能率の増進とを企てなければ到底今日の世界の舞臺に立つて競争することは出來ない。殊に我國の如くに天產物に於てあまり恵まれて居ない國では生産の人的要素に於ける科學的知識の應用を一層つとめなければならぬ。余がさきに人間工學なる一書を著はして人間力の經濟的使用の原理を述べたのも志は其處にある。此の點については我國に於ても近時著しい進歩を見たけれども、尙充分とはいはれない。

將來の大文明を荷う爲には日本民族の努力すべき尙多くの事項があるであらうが要は現實に即しつゝ高遠の理想を忘れては



ならぬといふことである。最後に余は上述の事柄を總括し、更にそれに關聯した數語を加へてわれ人の誠としたい。

長を採り短を補へ。これは日本民族の傳統的精神である。この精神を實現するには西洋文明について學ぶと共に日本固有の文明について一層深く究めて、そのよい點と悪い點とを明かにしなければならぬ。

われ等の力と使命とを自覺せよ。而して貧しいことを悲しむことなく、つとめて歡樂から遠ざかれ。『自己を愛するものは亡びる。』といふ訓言に聽け。

子孫の爲に自己を苦めよ。一人よりも二人、二人よりも三人、三人よりも四人五人と、より多くの子資をもて。然らば、その中から偉材の輩出する蓋然率は増すであらう。偉材こそ民族の寶であ

る。平時にも戦時にも最も必要なのは多數の偉材である。

精神と共に身體を鍊へよ。心身の健全は日々の能率を増す資本であり、文化向上の資源である。

志を固く持て。忠孝一致、忠君愛國は古來一貫した日本民族の中心思想であり、和魂である。如何なる學說にも、我が民族にとつてこれに優る思想はない。

教育の振興と産業の發達とは國防の確立と共に民族發展の基礎である。各自その適する所について、各々その素質を發揮して最高文明の生産といふ日本民族の大使命を完成せよ。

四海同胞主義は人類究極の理想である。日本民族の精神文化の宣揚によつて、世界人類を導いて協調の道程に上らしめなければならぬ。けれども正義は常に之を擁護する覺悟を必要とする。



正義の戦に對する準備なき民族即ち現實を忘れた民族は結局高遠の理想に達し得られない。

現實に即しつゝ而かも高遠の理想に向つて精進せよ。これ日本民族の大使命を果たす唯一の條件である。

## 日本民族の將來完

### 補遺

#### 第一 日本兒童と支那兒童の智能

一九二四年から一九二五年にかけて冬期に英領コロムビアで學校調査が行はれたとき、トロント大學教授サンディフォドはケル女史の援助の下にヴァンクーヴァの小學校に於ける日本兒童と支那兒童とについて智能検査を実施する機會を得た。用ひたテストはピントナ及びペータソン兩氏の工夫にかゝる動作テストである。

智能検査としてはビネー氏方法の如きよいものもあるが、此の方法では言語上の知識を必要とすることが多い爲に外國生れのもの又は外國人の兒童を検査するには不適當であるとされて居



る。サンディフォードが此の場合、動作検査を採用したのはその用意が周到であつたといつてよい。

氏等は先づ「年齢尺度」によつて採點して各兒童の精神年齢を定め、次に之を暦年齢で除して、所謂智能率を算出した。第一表は兩民族の男女別の智能率分配表である。

第一表に於ける中間數は劣等な方から數へても優等の方から數へても、ちやうど真中に當るものゝ値であつて、測定數の少いときには平均値よりも代表値として一層適當なことが多い。(拙著「教育的測定學」二六一—二九頁參照)

第一表によれば智能率の中間數は日本兒童の男では一一五・四、女では一一二・八、男女計では一一四・二であり、支那兒童の男では一〇七・七、女では一〇七・〇、男女計では一〇七・四である。支那兒童は

第一表

ヴァンクーヴァの小学校に於ける日本兒童及び支那兒童の智能率の分配

智能率	日本兒童			支那兒童		
	男	女	計	男	女	計
40—49	—	—	—	—	1	1
50—59	—	—	—	—	1	1
60—69	—	1	1	—	—	—
70—79	1	2	3	4	2	6
80—89	11	8	19	9	9	18
90—99	12	21	33	24	14	38
100—109	28	26	54	37	28	65
110—119	37	29	66	33	22	55
120—129	38	24	62	13	9	22
130—139	15	13	28	5	2	7
140—149	1	6	7	5	5	10
150—159	—	1	1	1	—	1
160—169	—	1	1	—	—	—
170—179	1	—	1	—	—	—
計……	144	132	276	131	93	224
(中間數)	115.4	112.8	114.2	107.7	107.0	107.4

日本兒童よりも六・七だけ劣つて居る。而して白人の智能率は此のテストに於て中間數一〇〇になるのであるから支那兒童も日



本兒童も共に白人よりも優つて居ることになる。尤も此のテストによる智能率はビネー氏方法によるものよりは多少高い値が得られるといふことであるが、サンディフォードは次の如くに結論して居る。

「種々の材料から推察するに日本人は英領コロムビアに於て智能の最も優れた民族であり、支那人については多少疑問はあるが、智能に於て先づ第二位を占めると信すべき種々の理由がある。

此の日本人や支那人の優越は確かに選擇の結果である。英領コロムビアに移住して來た日本人や支那人は、伶俐で、策略、勇氣の如き特質を有つて居るもので、愚鈍なもの、霸氣に乏しいものは各その本國に残つて居る。此の移住者が優れて居るといふことは世界史に於て新しい事柄ではない。英國が世界に於て卓越した

地位を占めたのは、伶俐で根氣のよいものだけが英國諸島に移住したことに基くといふ説を主張する人々もある。又米國陸軍に於ける智能検査の結果は、ロッキーマン脈を突破して太平洋沿岸に達した人々は山脈以東に残留したものよりも一層高い智能を示して居る。

第二には小學校で検査された日支の兒童は恐らくは選擇された兒童であらう。蓋し日本人や支那人は白人に比して一層優れたものが其の兒童を就學せしめる比率が多いであらうから。

それは、ともかくとして政治的及び經濟的立場からすれば、大抵の職業に關與して土着の白人と充分に競争の出來る(精神力の關する範圍だけでは)勤勉、伶俐而して儉約な他民族が居るといふことは一つの問題であつて、之を甘く解決するには卓越した政治的



手腕を必要とするものである。』と。

此の研究に於てテストされた日本兒童が日本の全人口を代表するか否かについて考へるにサンディフォドのいつて居る様に極めて劣等なるものは移住しないであらうが又極めて優秀なものゝ移住する數は少いのではないかとおもはれる。若しも此の様なことが肯定せられるならばヴァンクレーアに於ける日本兒童の平均智能は日本の全人口のそれを代表すると見てもよいのではないかとおもはれる。併し此の點は尙幾多の材料によつて檢定せられなければならぬ。(拙稿、日本兒童と支那兒童と智能——教育心理研究第二卷第一號參照)

## 第二 ハワイに於ける諸民族の氣質

ポルチュースはハワイに於ける六種の民族について長い間の經驗を有する農場支配人、社會隣保事業家、醫師、教育家等合せて二十五人をして次の八種の性質に關して品等せしめた。

一、計畫 遠謀があり將來に對する準備をする力を最も多く有するものを五點とし、反對に此の性質に於て缺けて居て、現存的に考へが動くことの最も著しい人種を一點とする。

二、暗示に對する抵抗——自己決定 これは他人の意見に追従して行爲をする傾向の著しいものを一點とし、理論的に事を考へ、容易に他人の意見に左右されない人種を五點とする。

三、衝動禁止——用心深いこと あまり考へないで行動を起す所謂衝動的なものを一點とし、これに反して、用心深いものを



五點とする。

四、勇敢 困難或は危険に際して決斷的で、仕事や境遇がむつかしくなつても容易に中絶しない人種を五點とし、その反對のものを一點とする。

五、自制 感情を抑制し異變に當つて心を亂さない人種を五點とし、突發的事業に當つて最も興奮し易く、たよりにならないものを一點とする。

六、不動 一つのこと心に心を固着し、目的に向つて着々と進んで行く傾向の著しい人種を五點とし、それに反するものを一點とする。

七、妥協 自分の思ふ所がまたげられたとき自己の主張を通して妥協する傾向の最も少いものを一點とし、それに反して

最もよく妥協するものを五點とする。

八、信用 信用を重じ、約束を守り、義務を果たす上に最も忠實な人種を五點として、最も信用し難きものを一點とする。

これ等八種の性質に於て最低一點と最高五點の中間に位するものにはそれ／＼適當な附點をすることとする。尙判斷に當つては特殊の個人についての評價をさけて、民族全體として考へることを要求した。かくて二十五人の判斷者が獨立に評價したものを總合すれば第二表の如くである。第二表の平均値を用ひて圖示すれば第一圖の如くなる。

第二表に於ける標準錯差は平均の信頼し得べき度を示す値であつて、標準錯差量の小さいものは各判斷者の評價の一致する度の多いことを示し、これに反して、その値の大きいものは評價が各



個人によつて一致する度の少いことを現はすのである(拙著、教育的測定學三五——四二頁参照)。今、これを日本人の諸性質に関する評價についていへば計畫力に於ける標準錯差は零であるから二十五人の評價が全然一致したことを示し、これに反して日本人

第二表 ハワイに於ける諸民族の氣質の品等

人種	計		勇敢		不動		自制		用心		自己決定		信用		安協	
	平均點	標準錯差	平均點	標準錯差	平均點	標準錯差	平均點	標準錯差	平均點	標準錯差	平均點	標準錯差	平均點	標準錯差	平均點	標準錯差
日本人	5.00	.00	4.84	.37	4.68	.47	4.44	.70	4.24	.86	4.00	.89	3.80	1.06	1.88	1.15
支那人	3.80	.57	3.92	.95	4.44	.70	4.40	.75	4.28	.60	4.28	1.08	4.72	.53	3.96	.82
ポルトガル人	3.24	.59	2.64	.85	3.48	.64	2.44	.80	2.64	1.05	3.64	.84	3.04	.78	2.28	.93
ハワイ人	1.72	.72	2.68	1.08	2.08	.91	3.28	1.08	3.60	1.08	1.92	.80	2.80	1.02	4.28	.94
フィリピン人	1.36	.49	2.16	1.05	1.40	.49	1.80	.98	1.44	.64	1.28	.45	1.60	.63	2.87	.96
ポルトリコ人	1.28	.53	1.56	.77	1.65	.63	1.65	.76	1.60	.71	2.40	1.10	1.26	.44	2.30	1.02

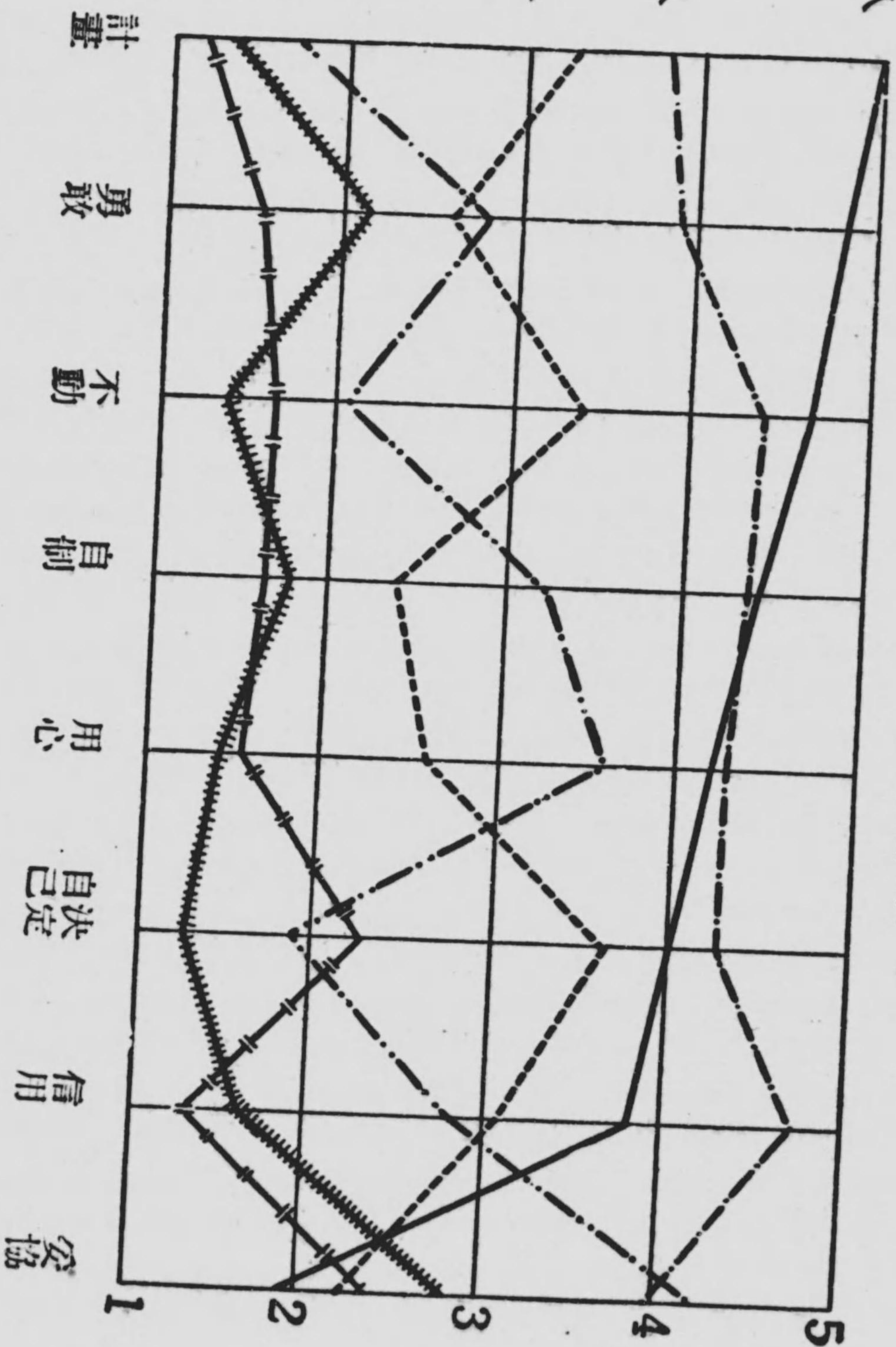
日本人

支那人

ポルトガル人

ハワイ人  
比島人  
ポルトリコ人

第一表 ハワイに於ける諸民族の氣質比較





の妥協性と信用とに於ける標準錯差は極めて大であつて、前者では一・一五、後者では一・〇六であるから此の二つの性質については各判断者の評價がまち／＼であつたことを示す。従つて日本人の計畫力についての平均點は確かで充分に信頼し得る値であるが妥協性と信用についての平均點は疑はしい値であることがわかる。

右の様な考へで第二表及び第一圖を見れば各民族について興味ある比較が出来る。即ち、多くの性質に於て最も優れて居るのは日本人と支那人であつて、妥協性を除いては兩民族とも群を抜いて居る。中でも日本人の優れて居る所は計畫、勇敢であつて、不動、自制、用心、自己決定に於ては兩民族殆んど等しく、信用に於て日本人稍々劣り、妥協性に於ては日本人は最も劣つて居る。(尤も信

用と妥協性についての評價は信頼し得べき度が少いけれども)

右の八個の性質は多少明瞭を缺く點もあり、又互に相重り合ふ點もあるが個人として又民族として優勝の地を占めることに對して重要な諸性質が列擧してある様におもはれる。併し、各の性質が等しい價值を有するとは思はれない。そこでポルチュースは各の性質に次の如くそれ／＼重みをつけた。即ち、計畫——六、自己決定——三、用心——二、勇敢——二、自制——二、妥協——二、不動——一、信用——二である。若しも各の性質の評價に於て悉く五點を得たとすれば、総合點は一〇〇點になる。かくて、百點法による各民族の社會能率指數が得られる。此の様な計算法によれば、日本人八五・五點、支那人八二・六點、ポルトガル人六〇點、ハワイ人五一・四點、フィリッピン人三三・三點、ポルトリコ人三三・三點となる。



## 参 照

[本書を編述するに當つて参考とした著書論文中の重なるものを掲げる。]

大日本文明協會譯，歐洲各國民の心性，大正元年

Darsie, M. L., Preliminary Report on the Mental Capacity of Japanese Children in California.

Dreyer G., The Normal Vital Capacity in Man and its Relation to the Size of the Body. —Lancet, Aug. 9, 1919

深田安文博士，外來思想と國民道德，大正10年

Gates, R. R., Heredity and Eugeuics, 1923

後藤新平子爵，日本膨脹論，大正13年

Gobineau, Inequality of Human Races, (1553)—English trans, 1915

Grant, M., The Passing of the Great Race, 1923

芳賀矢一博士，國民性十論(第廿三版)大正13年

Holmes, S. T., Trend of the Race, 1921

Huntington, E., Civilization and Climate, 1915

Character of Races, 1924

井上哲次郎博士，我國體と國民道德(第四版)大正14年

池田林儀氏，文明の崩壊，大正14年

入谷智定氏，集團心理學，大正13年

石川日出鶴丸博士，日本民族は果して獨創力を有せざるか——生理研究, I, 2.

生長——國民衛生, I, 2, 3.

金子彦二郎氏，死生の境に發輝せられたる日本國民性，大正14年

河上肇博士，祖國を顧みて(第廿二版)大正13年

黑板勝美博士，國體新論，大正14年

教育學術研究會編，佛國研究，大正6年

松本亦太郎博士，智能心理學，大正14年

此等の點數は勿論概略のことを示すに止まる。尙又前記の重さの與へ方は信用に關するもの、外は氏が個人の評價をするときに用ひて正當と認められたものであるが、個人の場合に適當であつた輕重のつけ方が民族評價の場合に適當であるか否かは明かでない。更に又各評價者が與へた元の評價が全然正しいとは云へないけれども標準錯差量の小さいものだけは正しいものとして許してもよいとおもはれる。かくて吾等は日本人の氣質が著しく優れて居ることを知るのであるが、唯此の研究に於てポルトガル人以外の白人との比較の示されて居ないことを甚だ遺憾とする所である。(ポルチュース及びバブコック共著、氣質と人種參照)





日本民族の將來  
定價貳圓參拾錢

大正十五年九月五日發行

昭和二年五月三十日增訂第八版發行

著者	田中寬一	東京市外西巢鴨町宮仲二二〇四番地
發行者	山本慶治	東京市神田區錦町一丁目六番地
印刷者	新井長治郎	東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所	株式會社秀英舍	東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發行所

東京市神田區錦町一丁目

培風館

電話東京三三七七  
三二六一七

Mayo, M. J., Mental Capacity of the American Negro, 1913  
 McDougall, The Group Mind, 1920  
 National Welfare and National Decay, 1921  
 室伏高信氏, 日本論, 大正14年  
 內閣統計局, 大日本帝國統計年鑑諸卷  
 日本帝國人口動態統計記述篇諸卷  
 中野傳治氏, 日本民族の獨創的能力について——教育, 第493號  
 永井 潜博士, 反逆の息子, 大正14年  
 永田秀次郎氏, 日本の堅實性(第五版)大正13年  
 槍崎淺太郎博士, 精神力學的研究, 大正11年  
 野上俊夫博士, 道德思想の發達(第二版)大正13年  
 岡 實博士, 國民的創作の時代(第七版)大正13年  
 岡田道一氏, 衛生講話資料, 大正15年  
 小川通司氏, 空間教育の實際, 大正13年  
 Porteus, S.D., Temperament and Mentality in Maturity, Sex and Race, J. of App. Psy. VIII. 1, 1924.  
 坂井衡平氏, 日本國民性論, 大正11年  
 Spengler, O., Der Untergang des Abendlandes, 1923  
 Stoddard, L., Racial Realities in Europe, 1924  
 高山林次郎博士, 國民精神の統一(樗牛全集第四卷)  
 田中芳麿博士, 生物の進化と突然變異——東洋學藝雜誌第42卷, 第1號  
 谷本 富博士, 日本國運の將來——梨庵漫筆, 第12號, 大正15年  
 Terman, Intelligence of School Children, 1919  
 德富猪一郎氏, 大和民族の醒覺(第五版)大正13年  
 上杉慎吉博士, 日米戰爭の必至と日本國民の覺悟, 大正13年  
 吉田章信氏, 體育資料統計彙纂, 大正13年  
 田中寬一, 人間工學(第五版)大正15年  
 教育的測定學, 大正15年



文學博士 小西重直序 文學士 加藤仁平著

第三版

# 日本教育思想史の研究 和魂漢才說

菊判總布裝頗高雅  
全一冊箱入  
定價參圓八拾錢  
送料十圓八錢

大和魂の名は三歳の童兒と雖も恐らく之を知らぬ者は無からう、而もこの大和魂といひ、大和心といふ國家的民族的の自覺が何時頃から始り、時代と場所と人物に依り如何なる變遷を経て今日に到つたかを明にし得る者が幾人あらうか。

本書こそは加藤文學士が永年探究研鑽せる大和魂思想の發達の研究の成果であつて、普く日本各地の圖書館、古社寺、舊家等について極めて熱心忠實に重要なる史料を搜り求め苦辛慘憺の結果、古來一般に菅公のものと信ぜられ、我が國民文化向上の指導原理として重大視されてきた「和魂漢才說」の眞實相を學術的に闡明し、更に、和魂漢才思想の發展、天滿宮信仰の概況、偽作たる菅家遺誠の後世に及ぼせる影響を學派的に詳説し、學界に偉大なる貢獻をなすと共に今や世界的研究の焦點となれる大和魂の歴史的變遷を明にし、斯界の驚異となれる著で、文學博士田中寛一氏は本書を評して「この様な眞面目な研究によつて吾々の誇りとしてゐる大和魂が如何なる背景によつて哺育せられたかを知ることが出来たことを喜ばしく思ふ、苟も日本民族の發展に對して興味を有する人々は必ず一讀すべきである」とまで激賞し、文學博士高瀬武次郎、同谷本富氏を始め學界の名士より絶大の謝辭を受けた、その資料の豊富なること、出所文献の確實なること、加ふるにその斷案の正確にして妥當なること、まことに永く後世の歴史に残るべき名著である。

大和民族の研究に興味を有する人々は勿論、學者、教育家、宗敎家、軍人、學生を始め日本人としての意識を有する人々の必讀せねばならぬ新著である。尙、卷頭小西博士の序文は歴史と教育との關係についての一大文章であり、卷末の大和魂思想の年表は斯道研究者の尊き參考資料として眞に得難きものといはねばなるまい。

東京 培風館 發行



546

221



